

---

# レイコン

沙 亜竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

レイコン

### 【Nコード】

N6940X

### 【作者名】

沙 亜竜

### 【あらすじ】

玲は友人の友雪とともに、女の子の幽霊が出ると噂の旧体育倉庫へ向かった。そこで、振り回して操作するゲーム機のコントローラを発見。なにげなく振ってみると、それに合わせて幽霊の女の子桜が出現した。玲たちは幽霊を操作できる『Oコン』を使い、桜の願い 幽霊の友達作りの手伝いをする羽目になる。

「おっ！ 九十五点！ 見ろよ、あの女子！ 二年の先輩かな。なかなかいいラインしてますな〜！ じゅるり」

「……またそういうことを……。あんましジロジロ見ちゃダメだつてば」

「なんだよ？ お前は興味ないつてのかわ？」

「そりゃ、興味なくはないけどさ。前みたいに、また変態扱いされちゃうかもしれないじゃん。僕まで一緒に……」

「巻き添えは嫌だつてのかわ？ 親友なのに、つれないヤツだな〜！」

「親友、というかわ悪友でしょ……」

「なんだと、コラ！ えい、ヘッドロック！」

「うわっ！ やめてよ、暑苦しいつてば！」

「いいではないか、愛いヤツめ！」

「やめてつてば！ 今度は別の意味で変態扱いされちゃうよ〜！」

「なにを言うかわ。俺とお前の仲じゃないか！」

「どついう仲さ！？ ただの友達つてだけじゃん！」

「ひどいつ！ 遊びだつたのね！？」

「ふざけたこと言つてないで、離れてよ、ほんと。暑いんだから！」

「う〜ん、確かにこの汗ばむ陽気の中じゃ、男同士でじゃれ合うのはちよつと気持ち悪いな」

「ちよつとじゃないし、こんな陽気じゃなくなつて嫌だよ！」

「嫌よ嫌よも……」

「好きじゃないからね」

「う〜ん、いけずう〜！」

「気持ち悪いつてば！」

「そうは言つても、体のほうはどうかな？」

「わっ、ちよつと、くすぐりは反則だつてば！」

「ほれほれ、俺に身を委ねて楽になつちまえよ」

「くすぐられてたら、楽になんかならないってば！ あはははっ！」  
朝の通学路に、男ふたりのじゃれ合う声がこだまする。  
ひそひそひそ……。  
周囲を歩いていたら何人かの生徒が若干距離を取りながら、僕たちのほうに白い目を向けてくる。

ちょうど今日から衣替え。制服の半袖から伸びる女子の二の腕が眩しく感じられる、そんな朝の登校風景。

六月だから普段ならまだ少々肌寒いことも多いはずだけど、今日は朝から汗ばむくらいの陽気。それなのに、こんなに男同士でくっついて……。

はぁ……。今日もまた、僕まで変態扱いされてしまったみたいだ……。……。

僕、あやづるれい綾鶴玲は、もみじがおか紅葉ヶ丘学園高等学校に通う、高校一年生。

玲なんて女の子と間違われがちな名前で、背も低めでちよつと細身、メガネ越しにもまつげの長さがよくわかると言われ、顔立ちも少々女の子っぽいらしい僕だけど、れっきとした男子生徒だ。

登校中は制服だし間違いようがないからいいのだけど、休みの日に私服で歩いていたらナンパされかけたことがあるという、黒歴史を持っていたりする。……こんなこと、恥ずかしくて誰にも言えないけど。

そして、僕の隣を歩いているもうひとりの男子生徒は、阿久玉友雪<sup>あくだまともゆき</sup>。

中学時代に知り合ってから、なんだかんだでずっと一緒にいる、腐れ縁の悪友だ。

ちよつと……というか、かなりのスケベで女好き。年がら年中エッチなことを考えている変態チツクなヤツだったりする。

そりゃあ、健全な男子高校生なのだから、女子の柔らかさそうな体のラインとかに目が行ってしまうってのは、まあ、普通のことだとは思っけど。

考えるだけだったら、べつにいいと思う。でも、こいつの場合、しっかり口に出してしまうのだ。

隣にいる僕まで同類だと思われるから、たまつたもんじゃない。

にもかかわらず、こうして一緒に登校しているのは、友雪のことが嫌いなわけではないからだ。もちろん、女の子っぽく見られてしまふ僕ではあつても、同性愛的な意味での好きとかではないけど。

ただ、いつも元気で明るい友雪の影響で、僕も日々楽しく過ごせているのは確かだ。

小学生の頃からメガネ君とかマジメガネとか呼ばれていた僕。

いじめられたりはしていなかったし、クラスに馴染めないわけでもなかったけど、それでもどちらかというと静かでおとなしい性格だから、学校行事のいろいろなイベントも、心からはしゃいで楽しめるという感じではなかった。

それが変わったのは中学に上がってすぐ、名前の順で僕の目の前の席だった友雪が、それはもう鬱陶しいくらいに話しかけてくるようになったからだ。

その後、なんだかんだでずっと同じクラスになり、同じ高校に進学した今でも同じクラス。

四月に新しいクラスとなった場合、席順は名前の順になるのが普通だから、同じ『あ』で始まる名字のおかげで、最初の席替えまでは四年連続で僕の目の前には友雪の背中があつた。

女好きな友雪ではあるけど、少なくとも僕が知り合ってから以降、彼女がいたことはない。知り合う以前だと小学生だし、きっと彼女いない暦は年齢と同じ十五年になるはずだ。

友雪は背も高めで、若干たれ目気味ではあるものの、顔立ちもなかなかハッキリしていて男前だと思う。それなのに彼女がいないのは、ひとえに性格に難があるからなわけだけだ。

でも僕にしたって、友雪同様、彼女いない暦十五年なのだから、人のことをとやかく言う資格はないのかもしれない。

「玲、これ見てみるよ」

休み時間になるやいなや、目の前の席の友雪が後ろ、つまり僕のほうへと振り向き、バサリと机の上になにかを広げた。

「どうしたの？」

「ほら、これ」

友雪が指差す先には、広げられた雑誌のページの一角。女の子の水着写真が写っている部分だった。

どうやら、いろいろなアイドルの写真が載っているグラビア雑誌のようだ。

「って友雪、またこんなの持ってきて。校則違反でしょ？」

「堅いこと言うなって。それより、よく見るよ」

黄色いセパレートの水着は布の面積がかなり小さめ。ちょっとぽつちやり気味のその女の子は、肌も真っ白で、健康的な体型をしている。

とくに目を惹くのは、たわわに実った胸のふくらみだろうか。健全な男子としては、どうしても視線が吸い寄せられてしまう。

「……うん。すごいね」

「いや、それもあるが、そんなことより、顔だよ顔」

「え？」

言われて視線を上げる。

栗色の髪の毛を頭の両サイドで束ね、リボンで留めてツインテールにしている若干の幼さを感じさせるような髪型が、元気いっぱいなイメージで清々しさを漂わせる。

太陽の光を浴びて満面の笑みを浮かべるその女の子の顔は、素直に可愛いと思えた。

「うん、可愛い子だよね」

「だから、そうじゃなくて！ 誰かに似てると思わないか？」

「え〜？」

そう言われても、まったくピンと来ない。友雪は、一目瞭然だとしても言いたそうな目で、僕を睨みつけてるけど……。

「……誰？」

「だ〜、もう！ 響姫だよ響姫！」

「……え〜？ 似てる……かな？」

僕は首をかしげる。

響姫というのは、僕の幼馴染み、音鳴響姫のこと。

おとなり、なんて名字の幼馴染みだけど、べつにお隣さんではない。

ただ、幼稚園で同じ桃組になってからのつき合いという、友雪以上の腐れ縁と言ってもいい女の子だ。

とはいえ、クラスは結構別々になっているし、せつかく同じ高校に入学したのに、今もクラスは別。家もそれほど近いわけではないから、一緒に登校したりもしていない。

まあ、女子と一緒に登校していたら、冷やかされてしまいそうだけだ。

クラスは違っているけど、なにかと偶然会ったりすることも多く、よくお喋りはしているから、クラスの女子よりはずっと親しい関係と言えるかもしれない。

そんな響姫と、このグラビアの子が、似てる……？

いやいや、ありえないって。響姫はもっと地味だし、ぽっちゃり度もずつと上だし。

「……お前、随分失礼な感想を思い浮かべてないか？」

「え？ そんなことないと思うけど……。そりゃあ響姫に直接言ったら、半殺しだろうけど」

「充分失礼なことっばいぞ」

呆れ顔の友雪。

「だいたい玲は響姫のこと、男友達と同格くらいにしか見てないだろ」

「だって、男みたいなもんじゃん」

「……確かにそうかもしれないが、あれでも一応女の子なんだから」

「一応って、友雪だって失礼なんじゃ……」

「そうかもな。ま、ともかく、この雑誌の子、俺はぱつと見で似てると思っただけど、幼馴染みでずっと見てきた玲に言わせたら全然似てないってことだな」

「うん」

迷いのない僕の答えを聞いて、友雪は苦笑まじりのちょっと微妙な表情で、雑誌を自分の机の中に仕舞った。

「そういえば、旧体育倉庫の幽霊の話、知ってるか？」

といった声が聞こえてきたのは、ちょうどそんなときだった。

「あゝ、知ってる知ってる！」

僕たちの斜め後ろの席辺りに集まっていた、数人の男子グループ。そこから響いてきた会話だった。

「部活の先輩、実際に見たんだったさ。しかも、手を握られたとか」「え？ 相手は幽霊なの？」

「そうなんだよ。それが、えらく可愛い女の子の幽霊らしくてさ」「詳しく聞かせてもらおうか」

と、すぐ目の前の席に座っていたはずの友雪が、いつの間にか話をしているグループの横まで移動し、唐突に話しかけていた。可愛い女の子、ってフレーズに食いついたんだろうな、と容易に想像できる。

とりあえず、僕も体の向きだけ斜め後ろにずらし、友雪の動向を見守ることにした。

「校庭の奥にさ、今は使われてない古い体育倉庫があるだろ？」

「あの、カギもかからなくなってるっていう、ボロい木造の小屋だな？」

「そうそう。で、そこに女の子の幽霊が出るって噂が流れてるんだ」「可愛い女の子の幽霊なんだな？」

「ああ、そう聞いたぞ。しかも幽霊なのに、いきなり両手を握ってきたとか」

「それで？」

ぐっと前のめりになり、さらに話の先を促す友雪。  
話しているほうの男子は、かなり引いている様子がかげえる。

「……幽霊に触れたのに、ちゃんと温もりもあったって言ったな。でも、呆然としてるうちに、目の前の女の子はスーッと消えてしまったらしい」

「ふむふむ。ということとは、消える前になら……」

一瞬考え込む仕草を見せると、友雪はそのまま自分の席に戻った。  
そして再び、すぐ後ろにいる僕のほうを向き、

「玲も聞いてただろ？ これは面白そうだ。じっくり調査したいし、昼休みに行くからな！」

と決意の表情で宣言する。

「……え〜つと、僕も一緒についてこと？」

「当たり前だろ？ もし呪われたり取って喰われそうになったら、真っ先に必要になるオトリだからな、お前は！」

僕の質問に、友雪は平然とそう言っただけのける。

「ひどっ！」

僕の抗議の声は、期待で頭がいっぱいになっている友雪の耳には、まったく届いていないようだった。

可愛い女の子だったら幽霊でもお構いなしなんて、ほんとに見境ないんだな、友雪のやつ。

そんなことを思いながらも、僕は友雪の後ろに続いて歩いている。昼休みになった瞬間に腕を引つ張られ、「行くぞ！」とひと言。友雪にとっては、お昼ご飯よりも女の子のほうが優先順位の高い事象なのだろう。

女の子に会うため旧体育倉庫に向かっている、と言えば、わくわくするべき状況なのかもしれないけど。

なにせ相手は幽霊なのだ。どんなことになるか、まったく想像もつかない。

腹が減っては戦ができぬと言うし、しっかりと腹ごしらえをしてから向かうべきという気もするものの、食べ終えたあとというのは眠気も出てきてしまうし、それはそれで戦に向いていない状態なのかもしれないよね。

などと、思考がかなりずれた方向に飛んでいるのは、やっぱり空腹のせいなのだろうか。

どちらにしても、手首を力強くつかまれ引つ張られている状態の僕には、抵抗のしようもなかったのだけど。

もう少し体を鍛えて、せめて友雪くらいには対抗できる力をつけるべきかな……。

下駄箱で上履きから靴に履き替えた僕たちは、昇降口を出て、校庭のほうへと足を向ける。

仲よく手をつないでいる、というわけではないものの、手首の辺

りをつかまれて引つ張られている状態の僕。

ひそひそひそ……。

朝と同様、なにやら怪しげな視線を向けられ、ひそひそ話の対象となってしまうたようだ。

これでまた、変態扱いされる確率が高まった気がするな……。

校庭の隅を通って、僕たちは旧体育倉庫のある校庭の奥、防風林の杉が植えられている辺りへと向かう。

学園の西側には山があつて、冬になると吹き降ろす冷たい風が強くなることから、山側にあたる校庭の奥に防風林が作られているらしい。

そして、その防風林の脇にひっそりとたたずんでいるのが、僕たちの目的地、オンボロ小屋。じゃなくて、旧体育倉庫だ。

実際のところ、オンボロ小屋と言ってしまうてもいいくらい、薄汚れてボロボロな感じなのだけだ。

この木造の古い体育倉庫、かなり年季が入っているのがうかがえる。

補修はされているみたいだけど、おそらく学園の創立当初から存在し続けているのだろう。紅葉ヶ丘学園は歴史のある伝統校で、創立されたのは大正時代だとか。

なお、旧体育倉庫という名前からわかるように、昔は体育倉庫として使われていた。

十数年前、学園全体にわたる大規模な増改築が行われた。その際、

校舎から近い場所に、もつと広い体育倉庫が新設された。

それによつて、この旧体育倉庫はお払い箱となつたのだ。

今でも取り壊されることなく残っているのは、防風林がある関係か、それとも単純に忘れ去られただけなのか。

ともかく、そうやって残された古い体育倉庫が、今でもこの校庭の奥にひっそりと存在している。

防風林の影響で周囲はちよつと薄暗い。たまに生暖かい風が吹き抜けていくのも、寂しげな雰囲気を助長させている。

幽霊が出ると言われれば確かに納得してしまいそうな、そんな立地と言えるだろう。

「ボロいね」

「ああ。カギは……どうやら噂どおり、かかってないみたいだな」

旧体育倉庫の前までたどり着いた僕たち。

木が腐りかけ、外れかかっているドアを眺め、友雪はそう言った。

……かと思つた次の瞬間には、ドアは開け放たれていた。

体育倉庫のドアというと、ちよつと重いスライド式のものをイメージするかもしれない。

実際、今使われている体育倉庫のほうは、そうなっている。

でも、この木造の古い体育倉庫は、手前に引き開けるタイプの木製のドアだった。

勢いよく開けたから、本当に外れてしまつたのではないかと心配になつたけど、どうやら大丈夫だったようだ。

旧体育倉庫の中は、薄暗くはあるものの、なんにも見えないというほどではない。

中にいろいろと仕舞っておくための建物なのだから、当たり前といえ当たり前前かもしれないけど。どうやら建物の奥のほうに、明かり取りの小窓がいくつか並んでいるようだ。

「うっ、ホコリっぽい……」

ケホケホと軽く咳き込む。

「さすがに古いだけあるな。昔の体育用具なんかも、そのまま残されてるみたいだ」

倉庫内を見回してみると、古くなった綱引き用の綱だとか高跳び用のマットやバー、玉入れ用のカゴに薄汚れた各種ボール類、カラーコーンにライン引きなど、いろいろな用具が雑然と置かれているのが目についた。

おそらく、使えそうなものは新しい倉庫に移し、古くなったものはあとで処分するつもりで、ここに仕舞ったままになっているのだろう。

ただどういいうわけか、会議テーブルとパイプ椅子なんかも置いてある。

テーブルは天板の端が剥がれかけていて結構古めに見えるけど、パイプ椅子はさほど古そうにも思えないような……。

僕が視線を巡らせていると、突然隣に立っていた友雪が大声を上げ始めた。

「お〜い！ 可愛い幽霊の女の子〜！ いるんだろ〜？ 出てきておくれ〜！ そして、俺とあんなことやこんなことを……ぐへへへ〜」  
「……そんな言い方して、出てくるわけないじゃん……。それに、」

いくら幽霊だからって、変なことしちゃ悪いと思っけど」

ため息まじりの僕の声に、友雪はすごい勢いで反論を返してくる。

「もしかしたら、あっさり出てくるかもしれないだろ？ それに、幽霊に人権なんかない！ もう死んでるんだからな！ ゆえに、なにをしたって罪にはならないっ！」

「……法律上だとそうなのかもしれないけど、死者の冒涜になるし、絶対呪われちゃうと思うな……」

「ふん、なんとでも言え。俺は俺のやりたいようにやるだけだ」

……どうやら僕は、とてもひどい友人を持ってしまったようだ。完璧に悪友だね、こいつは。

と、友雪のことは諦め、再び旧体育倉庫内に視線を向けていると、会議テーブルの脚の陰になる床辺りに、この場には不釣り合いな物体が転がっているを見つけた。

「なんだろう？ これ……」

僕は、床からその物体を持ち上げ、付着していたホコリを払う。白くて細長い直方体のプラスチック製品で、なにやらボタンなんかが並んでいる物体……。

これって、確か……。

「それ、Wiisのコントローラーじゃないか？」

「うん、そっだよね」

友雪の答えに、僕も頷き返す。

Wiisというのは、猫のマークのニャン天堂から発売されているゲーム機のこと。コントローラーを手に持って、振ったり傾けた

りすることで操作が可能なのが特徴で、大ヒットした。

今僕が持っているこの物体は、どうやらそのWiisのコントローラーのようだ。

「どうしてこんなのが、ここに落ちてるのかな？」

「誰かがここに入り込んで、ゲームでもやってたんだろ。電球もあるし、コンセントもあるみたいだから、電気もまだ通ってるんじゃないか？」

「なるほど」

今さらながらに、天井からぶら下がっている電球とスイッチ見つけた僕がそのスイッチを入れてみると、確かに電球は明るく旧体育倉庫内を照らし出した。

「うーん、これ、どうしよう？」

僕はWiisのコントローラーを手に持ったまま、友雪に尋ねてみる。

「とりあえず、振ってみればいいんじゃないか？」

「ゲーム機の本体がないのに、反応があるわけないってば」

そう言いながらも、僕は反射的にコントローラーを水平に振るっていた。

なにげなく、振ってみただけ、そんな感じだったのに。

どういうわけか、その動作に合わせて、

「きゃっ！」

という声を響かせながら、それこそゲームでキャラクターがフェ

ードインしてくるかのように、すーっと、ひとりの女の子が僕たちの目の前にその姿を現した。

「お〜！ 確かに可愛い！」

友雪が歓喜の声を上げる。

と同時に、いきなり現われた女の子のそばまで飛びつかんばかりの勢いで近寄ると、彼女の両手を握ろうとした。

……のだけど……。

「あ……あれ？」

スカッ！

友雪の手は、ただ空を切るばかり。

お互いの手は完全に重なっているように見えるのに、まったくぶつかったりする気配もない。

これってやっぱり、この女の子が噂になっている幽霊だったことだよ……。

幽霊、などというこの世のものとは思えない、というか実際にこの世のものじゃないだろうけど、絶対に恐怖の対象となるはずの存在を目の前にして、でも僕は、どういうわけか怖さなんて微塵も感じていなかった。

彼女の全身を眺めてみる。

顔立ちは、ちょっと幼い雰囲気はあるものの、きらきらの大きな瞳が印象的で、友雪の言うとおり確かに可愛い。

肩口で切り揃えられた髪の毛は、電球の明かりを反射して艶めく

綺麗な黒髪。

耳は長い髪で隠れているけど、そのすぐそばの、もみあげの辺りがくるりと内側にカールを描き、適度なアクセントとなっている。頭の後ろには、大きな青紫色のリボンをつけていて、余計に幼く見えてしまうけど、おそらくは僕たちとさほど変わらない年齢だろう。

学校に出る幽霊なのに、制服を着ているわけではなく、なんというか、女子大生が卒業式に着るような衣装を身にまとっている。

紫と白の矢が並べられたような模様の長めの上着と、上品な雰囲気をかもし出す紺色の袴。

両手のひらを体の前で控えめに重ね合わせ、静かにたたずむ様子を見ていると、大正時代からタイムスリップでもしてきたかのよう<sup>に</sup>に思えてしまう。

と、そんな彼女が、静かに向きを変える。真っ直ぐ　僕のほう<sup>へ</sup>。

そして、すーっと音も立てずにゆっくりと歩いて近づいてくる。幽霊の場合、浮遊して、と表現するべきだろうか。

ぎゅっ。

気づけば、僕の両手は、彼女の両手に包まれていた。

友雪は握ることができなかった彼女の色白の手。その温もりを、僕は今、しっかりと感じていた。

「な……！　玲ばっかり、ずるいぞ！」

などという友雪の叫び声は、すっぱりと無視させてもらおうとして。

「……温かい……。でも……キミって、幽霊……なんだよね……？」

僕は、疑問をぶつけていた。

「え〜っと、そういうことになると思いますの。……たぶん」

なぜか自信のなさそうな答え。記憶が混乱しているのだろうか。

……幽霊にも記憶ってあるのかな……。

それはともかく、女の子は僕の両手を握りしめながら、じっと瞳をのぞき込んでくる。

「こうやって会話もできるってことは……あなたなら、大丈夫かもしれませんの……」

「え？」

「あ……でも両手を握ったままじゃ確かめられませんの……。そう  
だ、こうすれば……。ちよっと失礼しますね」

大丈夫って、どういうこと？

確かめられないって、なにを？

失礼しますって、どうするつもりなの？

いくつもの疑問が、僕の頭の中には浮かんでいた。

でも、浮かんだだけで、口から言葉となって飛び出すことはなかった。

というよりも、言葉を発することができなくなっていたわけだけ  
じ。

「ん……」

女の子の吐息が、至近距離で　　というよりも、ほぼゼロ距離で

響く。

そして……。

僕の唇と、女の子の唇は、今この瞬間、ぴったりと重なっていた。

「ぶはっ」

女の子が、僕の唇から離れる。

離れてもなお、唇には生温かくて湿り気のある余韻が残っていた。

「はう、接吻、できちゃいました……。やっとです……。やっと、波長の合う方が見つかりましたの！」

僕の両手を強く握り続けながら、女の子はにこっと笑ってそう言った。

接吻って……。本当に大正時代の女の子だったりするのだろうか……。

「ぬあ〜！ 玲ばかり、マジでずるいぞ！ 俺、まだキスしたことね〜のに！」

と、友雪が頭を抱えて地団駄を踏み始めた。  
でもその言葉で、僕は気づく。

「僕、今が初めてだ……」

そして僕の言葉を聞いて、女の子のほうも、

「あ……わたくしもでした……」

そう言っ て頬を赤らめる。

僕も恥ずかしくなっ て赤くなっ ているのを自分でも感じたけど……でも初めての相手が幽霊っ て……カウントするべきなのかな……？驚いて頭が真っ白になっ ていっ るような状況だっ たからか、なんだかずれた感想が頭をよぎる僕だっ た。

「ところで、玲なら大丈夫っ て、どっ ういっ うことなんだ？」

ようやく諦めが ついたのか、友雪が若干冷めたよっ うな声で質問す る。

「はっ！ そっ でしたの！」

僕もさっ き頭に思っ 浮かべたその質問を聞いっ て、女の子のほっ ても当初の目的を思っ 出したよっ だ。

握っ ていた両手を離し、僕のそばから一歩後ろに下がる。  
そっ て、

「えっ と、コホン……それでは改めまして……」

なぜかひとつ、咳払いをしてから、女の子はこっ う言っ た。

「お願いです、わたくしの頼みを聞いっ てください……」

「わたくし、おほのぎやく朧木桜と申します。よろしくお願ひしますの」

「あ……こちらこそよろしく」

ぺこり。控えめにお辞儀をする女の子　桜さんに、僕と友雪もお辞儀を返し、それぞれ名前を名乗る。

会議テーブルとパイプ椅子があったから、僕たちは腰を落ち着けて会話モードへと入っていた。

僕と友雪が横に並び、テーブルを挟んだ反対側に桜さん、という位置取りになっている。

「それで……桜さんの頼みってのは……？」

「えっと……この学園には、幽霊がいるみたいなんですの」

ビシッ！

僕と友雪は、無言で人差し指を桜さんへと向けた。

「え？」

桜さんは首をかしげ、僕たちの指先を呆然と見つめる。

「あ……そっか。わたくしも幽霊でした……。えっと、そうではなくて、わたくし以外に何人か、幽霊がいるみたいなんですの」  
「ふむふむ……」

学校といえは幽霊話につきものかもしれないけど、正直僕はあまりそついった話を信じていなかった。

とはいえ……今現在、目の前に幽霊の女の子がいるわけだから、

その存在は信じざるを得ない。

手を握ったり、キスマでしちゃったりして、しかも温もりまで感じたし、足だつてちゃんとあるみたいだから、本当に幽霊なのか疑問に思ってしまうけど。

もしかして、本当は物陰に隠れていたただけの女の子……ってことは……？

などと僕が考えているあいだにも、桜さんの話は続いていた。

「それで、わたくし、その方たちとお友達になりたいんですの。お願いです、探すのを手伝ってもらえませんか？ わたくしはこの場所から出ることができませんので……」

両手を顔の前で組み合わせ、うるうるとした瞳で懇願。

「よし、俺は協力するぜ！ 大船に乗ったつもりで、ドーンと任せてくれよ、桜さん！」

友雪は、おそろくなにも考えず脊髓反射的に行動しているのだから、そう言いながら両手を前に出し、桜さんの手を包み込もうとする……ものの、やっぱりさっきと同じように、スカッとすり抜けてしまう。

……やっぱりこの子は、幽霊なんだな。ようやく納得した僕。

「うん。僕も協力するよ」

そう言つと、ぱーっと明るい笑顔をこぼす桜さん。

机の上に無造作に乗せたままだった僕の両手を取り、ぎゅっと握ってくる。

「……僕の手は握れるんだね、やっぱり」  
「くあく！ 納得いかん！」

友雪が叫んでいたけど、それは無視するとして。

「ええ。どうやら、波長が合う人じゃないとダメみたいなんです。今までも何人か、手を握ることまではできたんですけど、それ以上は無理で……」

「それ以上……？」

と口に出して、はたと気づく。

さっきのキス……。思わず頬が熱くなる。

「玲くんは、なんだかビビッと来たと言いますが、波長が完全に一致しているように感じたんです。本当は抱きつくとかでもよかったですけど、両手を握ったままでしたので、それでとっさに、その、唇を……」

ぽつ、と頬を朱に染め、顔をそむけて恥らう桜さん。とても清楚な雰囲気、可愛らしい。

「玲ばかり……玲ばかり……」

友雪はぶつぶつと同じことを何度も繰り返しつつやっていた。

「そういえば、これは？」

ふと、僕は一旦会議テーブルの片隅に置いておいた物体を再び手に取り、目の前に掲げる。

それは、Wiisのコントローラーだ。

「それには、わたくしも驚きましたの。隠れていましたのに、いきなり引つ張り出されてしまいましたから……」

「隠れてたのは……友雪が怖かったから？」

「はい。なんかもう、とつても怪しい人が来てしまったようなので、危険を感じて、隠れてやり過ぎすしかないと思ひまして……」

「賢明な判断だね」

「はい」

「……お前ら……」

なぜだか友雪が僕たちを睨みつけてきたけど、当然ながら無視の方向で。

「ともかく、これって普通にゲーム機のコントローラーだよねえ？」

そう言いながら、僕は軽くコントローラーを横に振ってみる。

「きゃっ！」

と、突然桜さんが椅子から横に……僕がコントローラーを振った方向に転げ落ち、床に倒れ込んだ。

幽霊のはずなのに、しっかりとホコリが舞い上がる。

「あつ、桜さん、ごめん！ 大丈夫？」

「はい……大丈夫ですの」

「どうやら、本当にこれで、桜さんを操ることができてしまっているみたいだ。」

「くいつ。」

軽くコントローラーの先端を上に向けてみると、桜さんはその場で立ち上がった。

「……あ、なんか、楽しいかも。」

「……なあ。それでそのまま、倉庫の外まで桜さんを操れないか？」「ふむ、やってみるよ。」

さっきみたいに転んだりしないよう、慎重にコントローラーを動かす。桜さんをドアの前まで誘導する。

「なんだか、不思議な感じですよ……」

「それは、こつちもただだね。」

「幽霊を操るコントローラー……。『0コン』とでも命名するか」「あはは、それいいじゃん。ゲーム機のコントローラーって、1コン、2コンとか言ったりするもんね！」

そんな会話を交わしているあいだに、桜さんは入り口のドアの前に立つ。

「……ボタンでも押せばいいのかな？」

ポチッとボタンを押すと、桜さんは右手を伸ばしてノブをつかみ、ドアを開けた。

桜さんの目の前には、校庭の景色が広がる。

「それじゃあ、いくよ?」

「はい」

僕は意を決し、さらにOコンを操作して、一步一步、桜さんを前進させる。

「あ……」

すんなりと。

「桜さんの体は、旧体育小屋から外へ……」。

「やりました！ 出られましたですよ！」

「お〜！ よかったね！」

と思っただのも束の間。

「でも、自分では全然動けませんの」

桜さんは、むむむと、可愛いらしく顔をしかめて力を込めているようだけど、彼女の体は一向に動く気配を見せない。

「つまり、旧体育倉庫の中以外では、Oコンで操作してやらないといけない、ってことか」

そう言いながら、友雪は僕からOコンを奪い取り、自分でそれを振り始めた。

「だけど、桜さんの体はピクリとも動かない。」

「く〜……。しかも、やっぱり俺じゃ無理ってことかよ。波長の問題ってやつか？ 玲ばっかり、ずるいな、ほんと」

「ずるいって、なにが……？」

0コソを返してもらいながら僕が尋ねると、友雪は平然と、こんなことをのたまう。

「俺が操作できたら、あんなことやこんなことをさせられたのに…」

「……波長が合ったのが友雪じゃなくて、ほんとよかったね」

「はい、心底そう思いますの……」

とりあえず、旧体育倉庫の中に戻った僕たち。再びパイプ椅子に座る。

やっぱり桜さんは、この倉庫内ならば、自分の意思でちゃんと動けるようだ。

「それでは改めまして……わたくしをお願い、聞いてくれます……よね?」

真剣な表情で、桜さんは僕にじっと瞳を向ける。最初から友雪の意見には聞く耳を持っていないようだ。

僕はもちろん、肯定の返事をするつもりでいたのだけど。

「もし聞いてくれないと……呪っちゃいますよ?」

桜さんはそう言いながら、にこっと笑う。

可愛らしい笑顔ではあるけど、幽霊ならではの威圧感とでもいうのか、背筋を凍らせるような抗いがたい恐怖感というものはしっかりとあるようだ。

「ひいっ！」

友雪なんかは、完全にビビっていたけど。

「わかった、協力するよ」

僕は笑顔を返し、そう答えた。

「ありがとうございます！ とても親切な方々で、よかったですの  
！」

「親切な方々……。どうやら俺も入ってるみたいだな……」

こうして僕たちふたりは、幽霊の女の子 桜さんの友達作りに  
協力することになったのだった。

旧体育倉庫での桜さんとの出会いのあと、僕たちは軽く話し合い、放課後と昼休みを使って学校にいる幽霊を探しに行くという約束を交わした。

桜さんに脅されるような形でもあった僕たちだったが、意外にも友雪は乗り気なようだ。

「幽霊だし、俺には触れることもできないが、女の子には違いないからな。女の子の頼みを断れるわけがないさ」

昼休みのあと、教室に戻る途中、友雪はそんなことを言っていた。

「……べつに、呪われるのが怖いからじゃないぞ!？」

続けられた言葉とともに、友雪の両足は、がくがくと震えているようだったけど。

それとはかく、放課後となった今、僕たちは再びこの旧体育倉庫を訪れていた。

「幽霊というのは、お互いにテリトリー意識があったりしますので、あまり交流を持たないものなんです。ほとんど移動もしないのが普通ですし……。ですので、誰がどこにいるとか、そういった情報は全然わかりませんの」

いざ幽霊探しに出かけようか、と意気込んでいた僕たちに、桜さんは申し訳なさそうな声でそう言った。

「じゃあ、闇雲に探すしかないの?」

「いえ、なんとなく気配というか、靈気を感じることはできますので、だいたいこっちの方向にいる、とかはわかると思いますの」「ふむ、だったら簡単かもしれないな」

ぼくの質問に桜さんが答えると、友雪がそう感想を漏らす。と、桜さんが否定の言葉を返してきた。

「そうでもないです。幽霊はお互いのことをなんとなく靈気で感じています、顔を合わせたりはしませんので、初対面ってことになりますから。基本的にずっとひとりであるわけです、普通は人見知りか激しいものだと思いますの」

……幽霊は人見知りが激しいってのは、ツツコミを入れるべきところなのだろうか？

「恥ずかしさのあまり、思わず人に襲いかかって、殺してしまうお茶目さんだって多いはずですよ」

……それは、お茶目と呼べるレベルを超えてるよ？ というツツコミは、入れてもいいのだろうか？

「そんな幽霊の方々なら、とつてもわたくしと気が合うと思いますのー」

両手を顔の前に組み、きらきらした期待いっぱい瞳で天井を仰ぎ見る桜さん。

……そんなやっかいな凶悪集団、ものすごく嫌だ、なんてツツコミは、さすがに入れるべきじゃないだろうな。

「というわけで、大変かもしれませんが。もしかしたら玲くんや友

雪くんの命が危ないかもしれないけど……。でも、よろしくお願  
いしますの！」

にっつ。

笑顔でとんでもないことを言い放つ桜さん。彼女が幽霊だからと  
いう理由だけではなく、別の意味でも恐怖感が湧き上がってくる。

だけど友雪は、すでに諦めているのか、単に女の子の笑顔に弱い  
だけなのか、おそらく後者だろうけど、

「わかった、任せておけ！」

と言って胸を張る。

「全部こいつにな」

僕の背後に隠れながら。

「……………って、友雪!？」

「俺には0コンを操ることもできないんだから、作戦参謀的な立場  
になるしかないだろう? そうすると、実行犯は玲ってことになる」

「勝手に犯人にしないでよ! それに、作戦参謀だったら指示する  
のは友雪ってことでしょ? 責任はそっちのほうが上がじゃあ……………」

「すべて部下が勝手にやったことです」

「うわっ! 全部僕のせいにして自分は逃げるつもりだ!」

「当たり前だろう? ま、桜さんが気を許してくれて、俺にも触れ  
られるようになるってんなら、もっと積極的に手伝うんだが」

「それはひどいってば! ……ねえ、桜さん?」

「はい……………。触らせてくれたら手伝ってやるなんて、ケダモノです  
の……………」

「…………いや、意味合い的には間違っていないかもしれないけど、ちょ

つとの違いでとんでもなく非道な表現に……」

桜さんって、案外腹黒い人なのかもしれない。……なんて口に出して言ったら呪われそうだけど。

「ふん、なんとも言うってくれて構わん。だが、とりあえずは手伝ってやるって言ってるんだから、感謝してもらいたいところだな」

「うん、ありがとう友雪。持つべきものは親友だね」

「恋人ができたなら親友なんてポイだが」

僕のフォローで、友雪は顔を背ける。

こんな言い方をしてはいるけど、それが照れ隠しだというのは、三年以上連れ添った親友の僕にはよくわかっていた。

それから僕たちは旧体育倉庫を出て、校舎へと向かった。

ずっと0コンで桜さんを誘導し続けていくとしたら結構大変かもしれない、と思っていたのだけど。どうやらその必要はなさそうだった。

というのも、桜さんは腕や肩につかまるなどして直接僕に触れていれば、手や足を動かすくらいはできるとわかったからだ。

また、旧体育倉庫の外でも、桜さんは言葉を喋ることなら問題なくできた。

そのため、とりあえずは僕の肩につかまってもらいつつ、桜さんが靈気をたどって幽霊のいる方向を指し示し、僕たちはそちらへ向

かう、という作戦を採用するに至った。

桜さんの指示で、校舎の中にまで入ってきた僕たち。放課後とはいえ、まだそれなりに生徒が残っている。

そんな中、着物に袴姿の女の子を従えて歩いていく男子生徒二名……。さすがにちよつと、怪しい気がしなくもない。

「ま、気にするな。玲が変に思われるのなんて、いつものことだろ」「それはほぼ、友雪のせいじゃん！ だいたい友雪だって一緒にいるんだから、同じように変な目で見られてるんだよ？」

「ふ……俺は人の目なんて気にしない、大きな人間なのさ」

「大きいのは態度だけ……いや、なんでもない！ ほら、ともかく今は、桜さんの友達探しが先決だよ！」

「はい、お願いします。……あつ！ ここ！ この中ですよ！」

そう言って指差した先には、ピンク色に塗られた壁が目飛び込んでくる細い通路。

そこは、女子トイレの入り口だった。

通路の入り口横には赤い女性を示すマークのプレートが取りつけられてあり、入り口の上にある表示用プレートにも、しっかりと『女子トイレ』の文字が書かれている。

「ここかよ……」

「うーん、どうしたものか……」

悩む僕たちに、

「早く入りましょうですよ」

と催促する桜さん。

「いやいや、僕たち男だから、女子トイレには入れないよ」  
「え〜？ ですが、確実にここから靈気を感じます。手伝ってくれませんか？」  
「そう言われてもな……」

人の目なんて気にしないとかが言っていた友雪でも、さすがに躊躇しているようだ。

しかもここは教室棟一階の女子トイレ。すぐ隣に並ぶ男子トイレは、普段僕たちも使っている場所だ。

ということは、男女問わず、クラスメイトも通る場所ってことになるわけで。

「あ……あのふたり、女子トイレの前でなにやってるの？」

「中をのぞき込もうとしてるんじゃない？ キモ……」

「っていうか、もしかして中に入るつもりなんじゃ……」

「うっそ……信じらんない……」

「あいつらって、あの、綾鶴玲と阿久玉友雪の最悪コンビじゃない？」

「ああ、あの噂の……。それなら、ありえるわね……」

なにやら周囲から、ひそひそと話す女子たちの声が。

どうでもいいけど僕たちについて、ひどく悪い噂が流れているみたいだ。

友雪のせいで、ここまで評価が下がっていたなんて、さすがにシヨックかも……。

思わず頭を抱え込む僕。

「どうしたんですの？ 元氣出してください」

そんな僕を、肩に乗せたままの手に少し力を込めて、桜さんは必死に慰めてくれた。

「ちょっと、あんなたち！」

突然、大きな声が響き渡る。

女子としてもちょっと高めもの、可愛らしいと表現していい感じの  
声。

他の人たちが遠巻きにひそひそと言っているだけなのに対し、臆  
することなく近づいてきた大声の主は、僕たちのすぐそばで両手を  
腰に当て、仁王立ちのポーズでさらに声をかけてくる。

「女子トイレの前で、なにやってんのよ！？ のぞき？ まったく、  
いやらしいわね、相変わらず！」

栗色の髪を両サイドでリボンを使って束ねたツインテールが、大  
声を張り上げるたびにゆらゆらと揺れる。

両手を腰に当てて胸を張っているポーズだから、大きなふたつの  
膨らみが、その圧倒的な存在感を主張するかのように強調されてい  
る。

このあいだ、友雪とグラビア雑誌を見ているときにも話題に出た  
僕の幼馴染み、音鳴響姫だった。

「……………ってちょっと響姫！ 相変わらずってなにさ!？」

「言葉どおりの意味よ！ 女子トイレの前で、弁解できるわけ？」

「え〜っと……………」

どう考えても、弁解できるような状況ではないよね……………。  
思わず言葉に詰まる僕に、響姫はさらなる攻撃をしかけてくる。





姫はおとなしくなった。

口の中でもごもごと、なにか言ってはいるようだったけど、僕にはまったく聞こえはしなかった。

「ほんと、玲ばかり、ずるいよな……」

「?????」

友雪までもが、若干トーンを落とした声で、なにやらわけのわからない文句をつぶやく。

とりあえず友雪のほうは放っておくとして、響姫がいきなり怒鳴らなくなったのは、ちょっと心配だな。

そう思い、僕は響姫に声をかけた。

「響姫、どうしたの？ 大丈夫？」

心配して声をかけたというのに、響姫はそんなことお構いなしといった様子で、僕がそっと差し出した右手を振り払うと、再び叫び声を発し始める。

「だ……だいたい愛人ってのは、本妻がいないと成り立たないものなんじゃ……！」

響姫の言葉に答えたのは、友雪だった。

「だって、本妻は……」

ちらり。

その視線は……なぜか、響姫のほうを向いていた。

「ななななな、なに考えてんのよっ！ まったく、もうー！」

響姫は両手を頬に当てて、なんだか真っ赤になりながら慌てている様子。

「え？ なに？ どういうこと？」

僕には、なにがなんだか、まったく意味がわからなかった。

「と……ともかく！ そのあんた！ 玲から離れなさい！」

そう叫んだかと思うと、響姫は桜さんの両肩につかみかかり、そのまま力任せに僕のそばから引き剥がす。

「……響姫、お前、その子に触れるんだな」

驚きの瞳を向ける友雪に、響姫は凄まじい早業で罵声を浴びせかけた。

「はあ？ なに言ってるの？ バツカじゃないの？ 脳ミソ、ちゃんどある？ 目、しっかり見えてる？ 全人類のために、いっぺん死んで？」

……なんとというか、あまりにもひどい言われようだった。

「ふうん、なるほどね……」

腕組みしながら、うんうんと頷く響姫。

頷きながらも完全に納得できてはいないのだろう、彼女の眉間にはシワが刻まれていた。

僕たちは響姫に事情を説明した。愛人疑惑を振り払うため、桜さんが幽霊だということも含めて、なにもかも全部。

周囲に人が集まってきていたので、女子トイレの前から響姫のクラス、一年一組の教室へと場所を移動している。

放課後となつてから少し時間が経っていたこともあり、教室内に残っている生徒はほとんどいなかった。数人残ってはいたけど、一瞬こちらに視線を向けただけで、さほど気に留めてはいないようだ。

「まあ、とりあえず、一応、なんとなく理解はしたわ」

響姫は自分に言い聞かせるようにそうつぶやくと、最後にため息をひとつこぼす。

現実と非現実のはざまで揺れ動いていた葛藤に、ため息で無理矢理終止符を打つたのだろう。……諦めたとも言つかもしれない。

それにしても、こうやって信じてもらえるなら、最初から正直に話すべきだった。

そうすれば、桜さんとキスしたのを知られることもなかったのに。あれ？でも僕は、どうしてキスしたことを知られなくなかったと思ってるんだろう？……やっぱり恥ずかしいからかな……？

(……相手は幽霊……ってことは、ノーカウントでいいはず……。だからまだ、大丈夫……)

響姫は響姫で、苦悩を眉間に刻みつけたままなにやらぶつぶつ言っているみたいだったけど、小さい声だったから僕には全然聞こえなかった。

たまにこっやって、僕に聞こえないようにぶつぶつと小声でつぶやいたりするんだよね、響姫って。どうしてなんだろう？

「それで、これからどうする？」

僕の頭の中で完全にメインルートから外れそうになっていた思考が、友雪の発言で強制的に引き戻される。

おっとっと、そうだった。今は桜さんの友達作りに協力している最中なんだから、そっちを解決させないと。

その桜さんは、相変わらず僕に寄り添ったままだ。

事情は説明したから、こっやってくつついて理由はわかってくれたはずなのに、響姫の視線はなんだかとても鋭く、そして凄まじく冷たい気がする。

思わず手に汗がにじむ。

「わっ」

にじんだ汗によって、握ったままだったOコンを落つこととしてしまいそうになり、僕は慌てて握り直した。

昼休みに使ったときにはすっかり忘れていたけど、Wiisのコントローラーにはストラップがついている。

そのストラップを手首に引っかけてストッパーを止めることで、コントローラーが手からすっぽ抜けるのを防ぐのだ。

ストラップがあったから床に落ちてしまうのは免れたけど。  
考えてみたら、使うときに取り出せばいいだけだし、ポケットに  
でも入れて持ち歩くほうが安全だよな。  
次からは、そうしよう。

と、そこまで考えて、僕はふと気づく。

0コンで桜さんを操る場合、彼女の姿が見えている必要がある。  
だから僕が0コンで桜さんを操作すると、女子トイレの中には入れ  
ないから、トイレの中を調べさせることもできない。

だったら、一応仮にも女子である響姫に0コンを持ってもらい、  
桜さんと一緒に女子トイレに入って操ってもらえばいいんじゃない  
だろうか？

思い立ったが吉日。僕はすぐに行動に移していた。

「響姫」

ぎゅっ。

「えっ!?!」

僕は響姫の両手をしっかりと握る。

正確には、持っていた0コンを響姫の手のひらに乗せ、落とさな  
いようにしっかりと握らせた、と表現するが正しいのだけだ。

「玲……」

すぐ目の前の響姫が、途端に頬を真っ赤に染め、なにやら瞳をう

るるるさせながら熱い視線を送ってくる。

「響姫に、僕のすべてを委ねるよ」

「つつっ！！！ あ……………う……………は……………はい……………わかりました」

彼女は茹でダコのように頭から湯気を立ち昇らせで、うつむき加減で僕のお願いを聞き入れてくれた。

でも、どうして響姫は真っ赤になってるのかなあ？

僕の役目である0コンの操作を、すべて任せるって言ったただけなのに。

そう思いながら、僕は0コンのストラップを自分の腕から外し、響姫の腕にしっかりとくくりつけてあげた。

「それじゃあ、桜さんの操作、頼んだよ」

僕が手を離してそう言うと、響姫は「わかった」と言っていたはずなのに、なぜか細かく説明させられた。

「1……………この大馬鹿野郎……………！」

どういいうわけか響姫は激怒し、

「……………まったくお前は……………」

と、友雪にも呆れられてしまった。

「さすがのわたくしでも、少々ドキドキしましたの……」

桜さんまで、わけのわからないことをつぶやく。  
ほんとにみんな、いったいどうしたんだろう？

「だいたい、響姫がOコンを操作できるわけないんじゃないか？  
波長がぴったり一致してる必要があるんだろ？」

友雪の言葉に、僕はハツとする。そう言われれば、確かにそうだった！

じつと、響姫に視線を送る。

「ちょっと、見つめないでよ！ (……また誤解しちゃうじゃない……)」

なぜか再び真っ赤になる響姫。後半は、またしても声が小さすぎて、なにを言っているか聞こえなかったけど。

ともかく、そう言いながらも、響姫はOコンを右手でしっかり握り、すつと軽く横に振る。

「きゃっ！」

「おっ！」

桜さんの短い悲鳴と友雪の驚きの声が重なった。

「動かせた……っぽい？」

「うん、そうみたい！」

つい今しがたまで僕に寄り添っていた桜さんは、一瞬にして2人

3メートル横まで移動していた。

響姫は笑顔を見せると、楽しくなったのか、0コンを無造作に振りまくる。

「わっ、きゃっ、ひゃうっ！」

0コンの動きに合わせて、桜さんは縦横斜めにわやくちやな動作で歩いたり走ったりし始めた。

「おゝ、これは面白いわ！」

調子に乗った響姫は、ボタン操作も加え始め、それによって桜さんは、妙な踊りを踊らされたり、その場でくるくる回ったり……。

「うひゃひゃひゃ！ これ最高！ えいっ！ やあっ！ たあっ！」  
「はうゝ、やめてください〜！ 吐いちゃいますう〜！」

幽霊の桜さんでも、さすがに耐えられなくなってきたのか、泣き言を漏らす。

「どうでもいいけど、幽霊でも吐いたりするものなのだろうか？」  
と、そのとき。

「あっ！」  
「きゃうっ！」

調子に乗りすぎて操作を誤ってしまったのか、桜さんの足が机の脚に引っかかった。

そしてそのまま、桜さんの体はバランスを崩し……。

思いつきり、前のめりに、綺麗な弧を描くように、見事にすっ転んだ。

「ぶべっ!?!」

なんだか面白い悲鳴を上げ、顔面から床に直撃。僕たちから見て向こう側に倒れた桜さん。

体が投げ出された勢いで、袴の裾がまくれ上がり、白くて細くて綺麗な生足があらわになる。

ふくらはぎから、ひざを越え、太ももまでもが目に飛び込んでくる。

そして袴は、さらに大きく空気を取り込むように膨らみ……。

僕はとっさに目をそむける。幽霊とはいえ、さすがに見てしまうわけにもいかないと思ったからだ。

でも……。

「おお〜! もうちょっと!」

友雪はしつかり凝視しているようで、歓喜の声を上げていた。  
……と思ったら。

「見るな、バカ!」

ドガッ!

「ぶべらっしゅっ!?!」

響姫によって腹部に強烈なエルボーを食らった友雪は、それからしばらくのあいだ、教室の床に倒れ込み、ごろごろ転がってのたうち回る結果となってしまった。

「愁傷様。

響姫の操作だと微妙に足もとが覚束ないことがあるみたいで、桜さんがさつき足を引っかけて転んでしまったのも、どうやらそのせいだったようだ。

波長が合ってはいるけど、完全に一致まではしていない、といったところだろうか。

とはいえ操作はできるし、調子に乗らなければ問題ないだろうという事で、響姫に任せる方向で話は進んでいった。

「それじゃ、行ってくるわね」

「えっと、行ってきますの」

「おう、行ってこい」

「行ってらっしゃい、頑張ってるね」

そんなわけで、僕たちは今、女子トイレの前で、中に入っていく響姫と桜さんを見送っていた。

女子トイレに入るのに、行ってらっしゃいって。それに、なにを頑張ってるのか。

周りに誰かいたら怪しまれるところだろうけど。

幸い、さつきまでひそひそと話していたような人たちも含め、トイレ付近には僕たち以外の誰の姿も見えなくなっていた。

女子トイレに入っていく女子ふたりの背中を見送ったあと。

僕と友雪にできることといったら、ふたりが消えていった女子トイレの入り口をじっと見つめながら、戻ってくるのを待つしかない。しばらく経つと、通りかかった生徒がこっちを見て、なにやらひそひそ話している声が聞こえてきたりしたけど。

また変な噂が広まってしまいそんな予感……。

「戻ってこないな……。聞き耳でも立ててみるか」

不意に友雪が、女子トイレの入り口近くに片ひざをつき、言葉どおり聞き耳を立て始める。

もちろん、周囲にはまだひそひそ話している生徒が残っているというのに。

友雪、それは自らトドメを刺すようなもんだよ……。

そう思っ僕がこうべを垂れた、そのとき。

「きゃ~~~~~~~~っ!?!?」

女子トイレの中から悲鳴が聞こえてきた。

一番奥のほうにいるのか、個室の中なのか、それとも途中で曲がっているトイレの通路の構造のせいなのか、聞こえてきた悲鳴はさほど大きなものではなかった。

「……。ただ……。」

今の声、響姫だ!

しかも、嘘とか冗談とかじゃない、切羽詰った余裕のない様子が感じられる、そんな叫び声……!

「響姫!」

僕は迷わず女子トイレに飛び込んでいた。

友雪もすぐさま僕に続く。

「あ……あのふたり、女子トイレに入ってしまったよ……?」

「やっぱり変態コンビなんだ……!」

このとき、変な噂に関するトドメを自ら刺してしまったことに気づいたのは、すべてが終わってからだった。

「うらめしい……うらめしい……」

そんな恨みの声を吐き出しているのは、真っ直ぐに切り揃えられた前髪で目まで完全に覆い隠した長髪黒髪の女の子だった。

なぜか体操着にブルマという服装。上着の肩口に縫われている校章の図柄を見る限り、学園指定のものようだ。

ただ、女子の体操着は十数年前にブルマからハーフパンツに変えられたと聞いている。

とすると、それ以前に生徒だった女の子の幽霊、ということになるのだろう。

その女の子はトイレの個室のドアの辺りで、床に座り込んでいる状態。そして彼女は、同じように床に座り込んだ響姫に、背後からしがみついている。

響姫は彼女の腕から逃れようと、必死にもがいていた。

その横には、おろおろした様子で立ちすくむ桜さんの姿もある。

「うらめしい……うらめしい……」

「きゃんっ！ やめてよ、ちよっと！ あんっ！」

もがいてあがいて、スカートも乱れまくっている状態の響姫が、

なんだか艶かしい声を響かせている。

よく見ると、背後から抱え込んでいる女の子の両手は、そのまま前方へと回され、がっしりと、というよりは、ふんにやりと、と表現したほうがいいのだろうか、響姫の大きな膨らみをすっぽり包み込み、そして激しく揉みしだいていた。

「おおっ！ 女の子同士で！ これはこれで、興味深い！」

なにやら友雪が歓喜の声を上げていたけど。

「こ……こら、友雪！ 見るんじゃない！ ってか助ける！ この役立たず！ 人間のクズ！ ゴミ男！」

当然ながらの、罵詈雑言。

「ぐえっ！」

しかも、激しく抵抗している響姫の右足からすっぽ抜けた上履きが、バツチリ友雪の顔面にクリーンヒットしていた。

偶然すっぽ抜けた、というよりは、おそらく狙ったんだらうな……。

と、そんなことより。

「ねえ、キミ！ やめなよ！ 響姫が嫌がってるじゃん！」

僕の声で、女の子は頭を上げてこちらに顔を向ける。

それでも彼女の両目はまったく見えない。どれだけ長い前髪なのやら。

ちなみに、こちらに顔を向けてはくれたけど、彼女の両手の動きは止まる気配がない。

「やめなよ。ね？」

努めて優しく、僕は微笑みを浮かべながら諭す。

でも女の子は、なにも答えてくれない。

もちろん両手も動かし続けたまま。

響姫が身をよじるたびに、スカートから太ももがちらちらと見え隠れする。

「女子トイレにいるってことは……もしかして、トイレのハナコさん……ですか？」

響姫と女の子のそばで立ちすくんでいた桜さんが、控えめにその声をかける。

そんなベタな、とツッコミを入れそうになる僕だったけど。

「……………」(じくん)

無言のまま、女の子は頷いた。そして視線を自分の胸の辺りに下げた。

響姫を抱きかかえるような格好なので、見えづらくはあったけど、そこにはしっかりと「1 3」「浦飯華子（うらひめしほなこ）」と書かれた布製の名札が縫いつけられていた。

こんな大きな名札って……小学生か！と思わなくもなかったけど。

今は胸もとに小さな名札をつける程度でいいことになっているけど、きっと昔は違っていたのだろう。

「しづめしい……………」

さつきから、幽霊としてはあまりにもベタなセリフをこぼしまくっているけど、それはいいとして、どうして響姫の胸を揉みまくっているのか……。

と、僕の疑問を感じ取ってくれたのか、華子さんはこう答えてくれた。

「ボクのはこんな小さいのに、この女はこんなにも大きい……。うらめしい……」

「って、そついうことかい！」

思わずツッコミの声も出てしまうというものだ。

「でも、揉んだからって、響姫の胸が小さくなるわけじゃないんじゃない……」

もちろん幽霊だから、両手から吸い取ることができる、なんて能力がないとも限らなかつたわけだけ。

どうやらそついった能力があるわけではないらしく、華子さんはきっぱりと言い放った。

「揉めば大きくなるって聞いたことがあるから……」

「そんなの根も葉もないデマ話だし、もし効果があるとしても、他人のを揉んだって意味ないじゃん！」

再び僕の口から飛び出したツッコミ。その勢いに、怯んだ様子の華子さん。

ようやく激しく揉みしだいていた両手の動きもピタリと止まっていた。

「うっうっ……うらめしい……」

動きは止まっても、まだ華子さんの口からは、恨みの言葉がこぼれ落ちてくる。

「そんなの気にすることないですよに」

華子さんを優しく諭すつもりなのだろう、桜さんが穏やかな口調で話しかける。

そんな彼女に、華子さんから返された言葉は……。

「いや、あなたは気にすべきでしょう……?」

「……ふえ? どうしてですか?」

「だって、ボクよりもずっと、真っ平らのぺったんこだから……」

そう言われた桜さん。

視線をゆっくりと下に向け、自分の胸の辺りを何度か軽くさする。

そして……、

「うっうっ、うらめしいですよ……。呪ってやるっ!」

と言いながら、僕につかみかかってきた。

「やめなさい!」

スパーン!

僕の鋭い平手ツッコミによって、桜さんのサラサラの髪の毛は見事なほど綺麗な弧を描き、舞い上がるように勢いよく広がっていた。

僕たちはトイレの華子さんを連れて、旧体育倉庫へと戻った。

学校霊は場所に縛られた地縛霊である場合が多いからか、華子さんも女子トイレから出ることができなかったのだけだ。

Oコンを使った操作によって、無事、華子さんを女子トイレから移動させることができた。

桜さんのように僕の肩につかまってもらうというのも試してみたけど、それでは女子トイレから出ることができなかった。

僕に触れていれば歩いたりできるのは、どうやら桜さんだけのようだ。

旧体育倉庫までたどり着くと、華子さんは自らの足で歩き回ることが可能になった。

「古くからある建物ですので、その分、霊気が多く集積しているみたいです。そのおかげで、ここでは幽霊の自我が揺らぐことなく、しっかり存在できるんですの」

桜さんはそんな解説をしてくれた。

「霊気が安定する感じ、華子さんにはわかりますよね？」

「うん……なんだか、とても空気が澄んでいて、安心できる気がする……」

こんなにホロくてホコリっぽい場所なのに……。

僕にはまったく理解できなかったけど、幽霊にとっては居心地のいい場所ということなのだろう。

「よかったね、華子さん！」

友雪は華子さんのすぐ目の前に立ち、そして彼女の両手を握ろうとする。……でも、スカツと、友雪の手はすり抜けてしまった。

桜さんには触れる僕でも、華子さんには触れられなかったし、それは響姫も同じだった。

にもかかわらず、さっきトイレで華子さんは、響姫に背後から絡みつき胸を揉んでいた。

とすると、あの女子トイレにいたほうが、存在は安定していたということなのかもしれない。

「友雪は見境がないわね。相手は幽霊で、しかも前髪で顔を隠しているから、可愛いかどうかもわからないってのに」

響姫が呆れ顔でつぶやく。

そんな言い方、華子さんに対して失礼なのでは。でも、確かに彼女の言うとおりだとは思った僕も、失礼なヤツなのかもしれない。

それはともかく、友雪はぐつと右手のこぶしを握りしめ、響姫のつぶやきに対して、こう力説する。

「俺はそんなことで差別したりはしない！ 女の子なら誰にでも優しくする！ それが俺の生き様だ！」

ぎゅっぽん！

背後に日本海の荒波でも背負ったような力強い主張に、響姫も僕も、呆れるばかりだったのだけ。

ぽっ。

華子さんは頬を染め、熱い視線で友雪をじっと見つめているようだった。

これは、フラグが立った、ってやつかな？

いつも響姫とドツキ漫才みたいに楽しそうな会話をしているし、華子さんやら響姫やら、物の怪の類に好かれる体質なのかな、友雪って。

響姫「物の怪なんて思考を本人に悟られたら、殺されかねないかも……」。今の考えは永遠に封印しておこうと心に誓う僕だった。

気づけば、時間的にはもうすっかり夜。すでに空の色は、夕焼けのオレンジから深い青へと変わり果てていた。

幽霊にとっては夜のほうが活動しやすいのかもしれないけど、さすがに夜中は校舎にも入れない。だいたい僕たち自身が家族に心配されてしまう。

そんなわけで僕と友雪、響姫の三人は、桜さんと華子さんを旧体育倉庫に残し、帰宅することにした。

翌日。僕たちは昼休みに旧体育倉庫へと集まった。

朝は時間が少ないし、他の休み時間はたったの十分しかないから桜さんの友達探しをしている余裕なんてない。

早起きして授業が始まる前に友達探しをするという手は、僕や友雪には使えるはずもない。

いつも遅刻ぎりぎりな生活をしているふたりだから、それは当然の真理というものだった。

そんなわけで、今日もまた昼食も取らずに、旧体育倉庫へと集まった僕と友雪。

昨日話したことで興味を持ったのか、どうやら響姫も手伝ってくれる気になったようで、今この場所でパイプ椅子に座っている。そして幽霊である桜さんと華子さんを含めた、総勢五名による作戦会議が始まった。

「桜さん、他の幽霊の情報って、なにかあるのかな？」

「んんんんん、なにもありませんの」

平然と答えが帰ってくる。会議はいきなり暗礁に乗り上げてしまった。

「華子さんは、なにか知らない？」

「……ごめんなさい……。女子トイレにずっとこもっていた身なので……」

……その言い方だと、別の意味にも思えてしまうけど。

それはともかく、幽霊であるふたりは使い物にならないということがわかった。

「うん……。友雪は最初からあてにならないし……」

頭の中で考えるつもりが、ぼそっと、ついつい声に出してつぶやいてしまう。

いくら友雪でも、ちょっと悪かったかな、という思いもあったのだけど、

「そうね。まだミジンコのほつが役に立ちそう」

響姫があっさり肯定し、さらにはミジンコ以下という評価を受け、友雪は「ゴンツ！」と大きな音を立てて会議テーブルに頭を突っ伏

してしまった。

うん、トドメを刺したのは僕じゃないから、問題なし。  
なにこともなかったように、僕は話を続ける。

「幽霊の噂と違って、この旧体育倉庫以外に、なにかあったっけ？  
トイレのハナコさんの噂だって、この学校では聞いたことなかつたし、そういうのって、あまりないような気も……」

「少し前だったら一部で幽霊話が盛り上がったただけだな。わざわざ霊媒師を呼んで除霊してもらったとかで、もうすっかり噂も消えたみたいだが……」

「ああ、そういえば、そうだったね。だけど……」

いつの間にか立ち直っていた友雪の言葉で、僕も思い出す。

一ヶ月くらい前だったかと思うけど、確かにそんな話を聞いたことがあった。

でも、除霊してもらったのなら、そのとき噂になった幽霊はもういないはずだよ。

僕がそんな諦めを含んだ言葉を漏らした直後、響姫が突然、大声で叫んだ。

「あっ、そうだ！ あたし、保健室の幽霊の話、聞いたことあるよっ！」

ホコリすらビックリして舞い上がりそうな大声で、隣に座っていた僕は耳がきーんとなってしまうけど。

他に手がかりはない以上、その話を詳しく聞いてみるしかないだろう。

「それ、どんな話？」

「ん？ 保健室に幽霊が出るって話。それ以上のことは知らないわ」



響姫は友雪の顔面を、一切の容赦もなく、思いつきり何度も何度も引つかき続けた。

みるみるうちに、友雪の顔には真っ赤なスジが何本も浮かび上がっていく。

うわぁ……痛そう……。

「な……なにすんだよ、響姫！」

「これで手当してもらおう口実ができたでしょ？」

笑顔でウィンクをぱちり。

響姫の意外に可愛らしい仕草も、顔面引つかき傷だらけで目も開けられない友雪には見ることができなかつた。

そんなこんなで、僕たちは保健室へと向かうのだった。

サッカーなどをして遊んでいる生徒の姿もある校庭の端っこを回り、校舎へと入った僕たち。そのまま廊下を抜けて、一路、特別教室棟の一階にある保健室へと向かう。

いまだに引つかき傷のせいで目が開けられない友雪は、響姫に手を引かれて歩いている。

そして僕のすぐそばには、肩に手を乗せながら桜さんが寄り添い歩く。

僕に触れていれば歩けるのは桜さんだけ。0コンで操れば華子さんも連れてくることができたのだけど、桜さんを0コンで操る必要が生じた場合に困ってしまう。

というわけで、華子さんにはお留守番として旧体育倉庫に残ってもらった。

コンコン。

「失礼しま〜す」

ノックをして小さめに声をかけ、僕たちは保健室へと足を踏み入れる。

でも、中は静まり返ったまま。養護教諭の里中先生はいなかった。昼休みだし、昼食にでも出ているのだろうか。

「あら。これじゃあ、手当てはしてもらえないわね。でも、いらないら好都合だわ」

平然と言つてのける響姫に、

「だったら俺、なんのためにこんなケガしたんだよ……」

と、ぶつくさ不平不満を漏らす友雪。その気持ちは、よくわかるけど。

「うるさいわね。そんな傷、舐めときゃ治るわよ」

「顔をどうやって舐めると……。響姫が舐めてくれるのか？」

「いっぺん死ね！」

ドガッ！

一蹴。どうやら友雪のケガは、またひとつ増えてしまったようだ。

ピコン！

不意に桜さんのツヤツヤの黒髪のとっぺんから、ひと房の髪の毛が垂直に伸び立つ。

「靈気を感じますの！」

……幽霊アンテナ？

といったツツコミを入れたい思いは、とりあえず置いておくとして。

桜さんは、僕のそばに寄り添ったまま、きよろきよろと保健室の中を見回し始めた。

保健室にはベッドが三つ設置されていて、それぞれがカーテンで仕切られる構造になっている。

そのうちのふたつはカーテンも開け放たれていて、ベッドの上には枕と畳まれた状態の薄手のかけ布団が整然と置かれているのが見て取れた。

そして残るひとつのベッドは、カーテンが閉じられている。

カーテンは床に届くほどの長さがあるため、身を屈めてのぞき込んだとしても、ベッドの下の状況すら確認することができない。

目の高さを完全に床と同じくらいにまで下げられれば、少しくらいなら見えなくもないかもしれないけど、そこまでするには、自分の身が床のホコリなどで汚れる覚悟が必要だった。

もちろん、そこまでする必要なんて全然ないし、だいたいベッドの下を見ても意味がない。

様子を知りたければ、カーテンを開ければいいだけだ。

でも……。

桜さんの髪の毛は、まだピンと立ったまま。危険があるかもしれない状況では、慎重にならざるを得ない。

「ここは慎重に行くべきよね……」

響姫ですら、冷や汗を垂らしながら、震える声でつぶやいた。

「そうだね……」

僕も頷く。

「慎重に……友雪を突っ込ませましょう」

「なぜじゃっ!？」

続けて提示された響姫の作戦に、友雪がなぜだか反論を返して  
くる。

「なぜって、友雪なら危険にさらされたって、なにも問題ないじゃ  
ん?」

「そうそう」

「なるほど、そういうものですね」

僕がきっぱり言い放つと、響姫と桜さんも同意してくれた。

「お……お前ら……!」

ようやく目は開けられるようになったらしい友雪が、かなり歪ん  
だ表情で睨みつけてくる。

「もちろん、冗談だよ?」

そろそろからかうのにも飽きてきたから、僕はそう言って友雪を  
解放してあげることにした。

でも、

「え? そうだったの?」

「あら? そうでしたの?」

響姫と桜さんのふたりは、思いつきり本気だったようだ。

さすがは、友雪。扱いが最悪だった。

この状況で友雪に任せるのはかわいそうなので、僕は自ら、閉め

切られたカーテンへと歩み寄る。

僕に寄り添っている状態の桜さんも一緒にカーテンへと近づき、そんな僕たちの様子を見て、響姫も仕方ないといった顔で近づいてきた。ひとりで取り残されるわけにはいかない、と考えたのか、友雪もカーテンのそばまで足を進めた。

四人でベッドのある空間を遮っているカーテンの前に並ぶ。

危険があるかもしれない。もしそうなら、一蓮托生。なにがあっても、僕たちは一緒だ。

もつとも、本当に危険ななにかを確認したら、無言のまま友雪をオトリにして、僕たち三人は逃げるだろうけど。

すつと、カーテンの端に手をかける僕。

こくり。

黙って見つめる響姫たちと頷き合い、僕は覚悟を決めて、カーテンを思いっきり横に引き開けた。

シャーシャーッ！

小気味のよいスライド音が響く。

ベッドの上には、小学校低学年くらいだろうか？ 飾り気のないシヨートカットの女の子が、すーすーと規則正しい寝息を立てて眠っていた。

「……なんでこんな小さな子が、ここで寝てるのかな……？」

僕の問いに、答えられる人はいなかった。

ただ、その声で目を覚ましてしまったのか、女の子が「ん……」と小さな吐息を漏らし、ふぁさりと布団を持ち上げて上半身を起こした。

まだ寝ぼけたままなのだろう、こしこしと両手の甲で目をこする仕草が、とても可愛らしい。

「お嬢ちゃん、どうしたのかな？」

ニコツと笑みを浮かべながら、やたらと楽しそうな口調で友雪が話しかける。

どうやら僕の親友は、こんな小さくても、女の子なら全然お構いなしでオツケーらしい。

やっぱり危ないヤツなのかも……。

寝ぼけているからか、それとも本能的に危機を察知したか、女の子は右手のこぶしを鋭く繰り出し、

「お嬢ちゃんじゃない！」

という言葉とともに、友雪のみぞおちの辺りに見事なストレートを炸裂させていた。

「うぐおおお……！」

おなかを押さえてうずくまる友雪。

「でも、これはこれで、なかなか快感かもしれん……」

なんとというか、さらに変な方向にも目覚めてしまったようだけど……。

ま、友雪はこの際、放置で。

「はいはい、まだ寝ぼけてるんだね？ でも、このお兄ちゃんなら

いいけど、他の人を殴ったりしたらダメなんだよ？ わかったかな？ お嬢ちゃん」

僕は笑顔で女の子を諭す。でも、なかなか頑固なようで、

「うう、お嬢ちゃんじゃないもん！ るなは大人なのだ〜！」

と大声で叫ぶ。駄々っ子のようで、見ていて微笑ましい。

「はいはい、早く大きくなれるといいでちゅね〜」

響姫までもが、緩みきった笑顔を見せながら、まるで赤ちゃんをあやすように接する。

「ねえ、お嬢ちゃん。保健の先生、どこに行ったか、知らない？」

微笑ましく眺めながらも、どうにか当初の目的を思い出した僕は、女の子に尋ねてみた。

すると……。

「ここにいるぞ！ るなが、ほけんのセンサーなのだ！」

えっへん、と、まだ発育し始めてもいなさそうな胸を張って、そのうのたまう。

「あはは、先生ごっことつき合ってる暇はないんだよね。ごめんね、今度遊んであげるから」

「うう、ごっごっじゃないのよ〜……」

ぐすん。

涙を目にいつぱい溜めながら、女の子はぶくぶくとほっぺたを膨らますのだった。

ガラツ。

渴いた音を立てて、保健室のドアが開く。

「あらあゝ？ あなたたち、どうしたんですか？」

昼食から帰ってきたのだろう、養護教諭の里中先生がベッド付近に集まっている僕たちに気づき、のんびりした口調でそう声をかけた。

この先生、口調も動作もかなりのんびりしていて、ほんわかした雰囲気をもし出している。

だから人気も高い先生なのだけど、授業をサボって先生に会いたいと保健室に来る生徒たちの仮病は、どんなに上手に演技していたとしてもすぐさま見抜くなど、意外に鋭い部分もあるのだとか。

そんな里中先生。

静かにドアを閉めると、ほとんど足音も立てず、僕たちのほうへと歩み寄ってくる。

「あらあら、ケガしてるのねえ？ 猫にでも引つかかれたの？」

優しく穏やかな笑みをたたえながら、里中先生が友雪に心配の声を投げかける。

顔面の引つかき傷を見て心配しつつも笑顔を絶やしていないことから、一瞬でたいした傷ではないと見抜いたのだろう。

声をかけられた友雪は、無言で響姫を指差す。対する響姫のほうはというと、そっぽを向き、口笛を吹いて知らんぷり。

「うふふ、なるほど、痴話ゲンカなのね」  
「違う!」「違います!」

里中先生の、のほほんとした言葉に、友雪と響姫が間髪を入れず否定する。

声のタイミングもピッタリ。絶妙なコンビネーションと言えるだろう。

「あつ、そつだ。先生、そんなことより、この女の子……」

僕がそう言いながらベッドのほうを指差すと、ついさっきまでそこにいたはずの女の子　るなちゃんは、いつの間にやらその姿を消していた。

ただ、人が寝ていたことを示すように、かけ布団は少々の膨らみを残している。

「女の子……?　ああ、そういえば女の子の幽霊の噂は、よく聞きますね」。私は見たことないですけど……」

頬に指を当て、微かに首をかしげながら、里中先生はそつつぶやいた。

具合が悪くて保健室に来た生徒がいた。急な腹痛だったらしい。トイレに駆け込んでも状況はよくならなかったとのことなので、里中先生は、しばらくベッドで休んでいくように指示した。

ベッドに横になり布団をかけカーテンを閉めてしまえば、そこは個室のようなもの。

もちろん声を出せば、保健室の中に誰かいるなら聞こえるだろう。基本的に里中先生は保健室にいるから、通常であれば気づいてもらえるはずだ。

でも、先生だってトイレに行ったり食事に行ったり、用事があった職員室などに出向くことなんかもあるわけだから、絶対にいるというわけではない。

このときがどうだったのか、正確にはわからないものの、おそらく里中先生が不在だった時間帯に起きた出来事なのではないかと考えられる。

ふと、誰かの気配を感じ、ベッドで寝ていたその生徒は目を覚ました。

寝ぼけまなこで枕に乗せたままの頭を動かし、気配のあるほうへ視線を向けると、ベッドの横に小さな女の子が立っていた。

「大丈夫か？」

大きくなりくりした瞳でのぞき込みながら、そう問いかけてくる女の子。心配してくれていることは、寝ぼけた頭でも理解できた。

ただ、眠気は全然消えておらず、意識もおぼろげな状態。なんだから頭も重いし、腹痛も残ったままだ。

「眠気もあるし、具合も悪いんだ。ごめん、またあとでね」

と言って布団を頭からかぶり、再び眠りに就く体勢に入る。

「具合が悪いのか？ それなら任せろ！」

子供っぽい可愛らしい声で、子供らしくない物言いのそんな言葉が聞こえたような気がした。

でも、すでにまどろみの世界へと到達しかけていた生徒は、そのまま再び眠りの淵へと落ちていった。

やがて、生徒は目覚める。さほど時間は経っていないように思われた。

そして気づく。

激しかった腹痛も、なんとなく重く感じていた頭も、今ではもう、すっかり治っているということに。

「それで、ベッドから起きてきた生徒に、その話を聞いたの」。その生徒は、夢だったんだと思います、と言っていただけ。でもね、それから何人も、同じようにベッドで休ませていた生徒から似たような話を聞かされたのよ」

のんびり口調でゆっくり喋る里中先生の話聞き終えたのは、その内容から考えると、必要以上に長い時間が経ったあとだったのだけだ。

それはともかく、ベッドで休んでいた生徒が見たという女の子…

…。さっき僕たちが見た女の子と同じだと思ってまず間違いないだろう。

でも、里中先生自身はその姿を見たことがないという。

先生がいると姿を現さない、ということだろうか？

と、そのとき。

先生の机の上にある内線電話が鳴り響いた。

「はい、里中です。……ええ。……ええ。わかりました、それでは、すぐ行きます。」

ひとしきり電話で話し終えた先生は、受話器を置くと、僕たちのほうを振り向き、苦笑まじりの笑顔を見せる。

「ちょっと用事ができたから、行ってくるわね。ケガの治療……できなくてごめんなさいね。」

友雪に対して、里中先生は申し訳なさそうに頭を下げる。

「大丈夫ですよこんなの、ツバつけとけば治りますって！」

響姫があっけらかんとした調子で言う。

自分が原因でケガをさせたわけだけど、相手が友雪だからこそ、こんな軽口を叩けるんだろうな。

「……それじゃあ、響姫がツバつけてあげるの？」

「んなわけあるか！ 死ね、バカ玲！」

僕の言葉に、真っ赤になって罵声を返してくる響姫。僕のほうはそれだけで済んだけど。

「だいたい、響姫のだと悪化しそうだ」

「お前も死ね！」

続いて口を挟んだ友雪のほうは、みぞおちを鋭くえぐるパンチを食らい、その場にうずくまる。

「くすつ。痴話ゲンカもほどほどにね」。というか、三角関係かしら？」

そんな言葉と苦笑を残し、里中先生は保健室から立ち去っていった。

「まったく、なに言ってるのかしらね、里中先生は！」

先生が保健室から立ち去ってから、響姫はぷりぷりと怒っていた。

「そうだよ。だいたい三角関係だなんて、僕は全然関係ないのにね？」

「どの口が言うかな、こいつは」  
「?????」

僕の言葉に、なにやら友雪まで不機嫌そうな声を漏らす。

「いったい、どうしたんだろう？ 友雪と響姫のふたりの時間を邪魔しちゃって怒ってるのかな？」

でもそれだったら、いつもこんな感じだと思うし……。

よくわからないから、さっきの会話を思い返してみる。

ツバをつけとけば治るって言った響姫に、響姫がツバつけるの？  
って言ったら怒って、響姫のだと悪化しそうだって言った友雪をさらに怒って……。

「だいたい友雪もおかしいよね。最初に保健室に入ってきたときには、響姫が舐めてくれるのか？ なんて言っていたくせに、今度は響姫だと悪化しそうだなんて。だから響姫は怒ったのかな？」

そう考えた僕は、そのことについて言及してみた。

「友雪、さっきは響姫に舐めてほしそうなこと言ってたのにさ、悪化しそうだなんで、ひどいでしょ」

「な……舐めてほしいだなんて、言ってる〜！」

「そうだっけ？ それに響姫のほうだって、恥ずかしかってただけで、舐めてあげてもいいとか思ってたんじゃない？」

「はあ！？ んなわけあるか！ 本気で嫌だつての〜！」

「またまた〜。素直じゃないな〜。絶妙なコンビネーションでラブラブな仲よしコンビなのに」

『ラブラブじゃない！』

にやけ顔を伴った僕の言葉に、一瞬のずれもなく、ピッタリと声を合わせるふたり。

「やっぱり、ピッタリ息が合ってるじゃん！ ひゅーひゅー！」

僕はここぞとばかりに冷やかしてみる。

普段このふたりには、僕がトロいからか、なにやらからかわれてしまうことが多いし。たまには反撃してみたってバチは当たらないだろう。

『違ってるの〜！』

やっぱりふたりは、声を揃えて反論してくる。

と、響姫がなにやらうつむき加減になって、もじもじと体をくねらせたかと思うと、

「だいたい、あたしは……」

そうつぶやいて、ちらちらと上目遣いで僕に視線を送ってくる。

「ん？ どうしたの？」

わけがわからない僕が問いかけると、

「……なんでもないわよ！」

響姫はまた怒り出してしまった。うーん、なんでだろう？ 響姫の横では、友雪もため息をひとつこぼし、呆れ顔を見せていた。

「あ……」

不意に桜さんの声が響く。

そういえば、桜さんもいたんだっけ。ずっと静かだったから、すっかり忘れてた。

仮にも幽霊だし、先生の前ではあまり目立たないようにしていたのかな？

里中先生、着物に袴なんていう大正時代風な格好の桜さんを、完全にスルーしていたってことになるけど……。

おっとりした先生だから、それも充分にありえるかもしれない。演劇の練習をしている生徒なのかと思っただけ、とか。

それはともかく、桜さんの声に、僕たちは視線を一方に向ける。そこには、さっきの小さな女の子、るなちゃんが立っていた。

「……あなた、先生の話に出てきた女の子？」

ようやく怒りも静まったらしい響姫が、怯えさせないようにと考

えたのだろっか笑顔でるなちゃんに語りかける。

「女の子ではない！ でも、さっきのは確かに、るなの話なのだ！」

るなちゃんは、えっへん、と、膨らみがまったく見て取れない胸を張って、そう言い放った。

でも、そうすると……。

「こんな幼女に、体調を治す不思議な力が……」

「幼女ってゆーな！」

僕が思わず漏らしたつぶやきに、るなちゃんは両手を腰に当ててご立腹。

「るなはこれでも、保健のセンサーなのだ！」

「先生ごっことは……」

「ごっこではない！ よく見てみる！」

またしても保健の先生だと言い張り始めたるなちゃん。僕の声を遮り、上着の胸の辺りを引っ張り、ほれほれと見せつけてくる。

そこにはしっかりと、『養護教諭 小山内おのやまるな』と書かれた、ピンで留めるタイプの名札が取りつけられていた。

どうでもいいけど、小山内って……なんともピッタリな名字だな、なんて言ったら、また駄々をこねられちゃうだろうか。

よく見てみれば、彼女のあまりの幼いイメージのせいで気づかなかったけど、るなちゃんが着ている上着は、確かに養護教諭のトレードマークとも言つべき白衣だった。

今どきの養護教諭だと白衣を着ない人も多いつて話だけど、紅葉

ヶ丘学園は歴史のある伝統校だからなのか、それとも本人の趣味なのか、里中先生はいつでも白衣に身を包んでいる。

同じように白衣のるなちゃんは、名札にも書かれていたわけだから、本人の言うとおり、本当に養護教諭なのだろう。

でも……うちの学校の養護教諭はひとりだけだったはず。とする  
と、るなちゃんはやっぱり……。

「るなちゃんは、養護教諭だった先生の幽霊みたいですよ」

僕の考えを肯定するかのようには、桜さんが結論を示す。

「そうなのだ！ るなはれっきとしたセンサーなのだ！ なぜかみんな、るなをお子様扱いしていたが……」

「そりゃあ……」

当然でしょう、と続けようとしたのだけど。るなちゃんに涙目でうるうる見つめられ、僕は口をつぐんだ。

でも友雪の口にまで戸を立てることなんてできるはずもなく。

「見るからに幼女だからな」

「うわ~~~~ん！ 幼女じゃないやい！」

友雪の言葉に、るなちゃんは大泣きしながら反論する。

ポカポカとるなちゃんに叩かれながら、珍しくちよっと困ったよ  
うな表情を見せる友雪。

少し考えて、こう言った。

「じゃあ、養護教諭の女つて意味で、養女……ってのは、どうだ？」

「……うん、それならいいのだ！」

「いいんかい！」

僕のツッコミの音が、狭い保健室の中にこだました。

「さて……それじゃあ、るなちゃん。わたくしたちと一緒に、ここを出ましよう」

桜さんがいつもの穏やかな笑顔で提案する。

「そう言われても、実はここから出られないのだ」

るなちゃんは一瞬にして、しゅんと沈んだ表情に変わる。なんと  
いうか、ころころと表情の変わる人だ。

それにしても、子供扱いされるのを嫌がっていたくせに、「るな  
ちゃん」という呼び方は受け入れているような。

「大丈夫ですの。これがありますから」

うつむいてしまっていたるなちゃんを前にして、桜さんはそう言  
うと、僕の腰の辺りを指差す。

正確には、僕のズボンのポケットに入れられている『Oコン』を。

「そうだね。華子さんも、このOコンで操って女子トイレから離れ  
られたし」

僕もそう言って、るなちゃんを慰める。それでもまだ、るなちゃん  
は納得してくれない。

「でも、怖いのだ……」

「わたくしたちがついてますから、大丈夫ですよ」

「でもお……」

桜さんが後押ししても、るなちゃんは渋い表情を崩さない。

と、ここで桜さんからトドメの一言。

「それじゃあ、るなちゃん。飴玉あげますから、一緒に行きましょう」

「うー！」

「うん、行くのだ！」

ぱーっと明るい笑顔を咲かせ、思いっきり頷くるるなちゃん。

……やっぱ、お子様じゃん。

そんなつぶやきを、場の空気を読んで、どうにか口に出すのはい留まる僕だった。

どうでもいいけど、幽霊なのに飴玉を舐めることなんてできるのかな……。

「生徒会長って、かっこいいよね」

クラスメイトの女子がうっとりした目で壇上に立つ生徒会長を見つめながらそう言う。

「ほんと、凛々しすぎだよな」

男子生徒からも感嘆まじりの声が漏れる。マンガだったら目がハートマークになっていそうだ。

今日は午後から生徒総会だった。

壇上で全校生徒を前に張りのある声を響かせているのが、羨望の眼差しを一身に浴びている生徒会長、湯浴<sup>ゆあみすか</sup>霏<sup>ひ</sup>香<sup>か</sup>先輩だ。

僕たちの通う紅葉ヶ丘学園では、もともと女子校だったからなのか、女子が生徒会長を務める習わしとなっている。

副会長は男子と決められていて、それ以外の役員は年度によってまちまちだとか。

なお、今の会長は三年生。副会長も三年生で、書記と会計は二年生だったと思う。

毎年九月に生徒会選挙があり、立候補および推薦で候補となった人に対し、生徒の投票によって生徒会長、副会長、書記、会計の役員が決められる。それ以外の平役員に関しては、必要に応じて役員が指名する形を取る。

任期は一年間で、十月に発足した生徒会は、翌年の九月まで続く。そのため、選挙で生徒会長に立候補できるのは二年生と決まってい

る。

副会長や書記、会計については、一年生でも可となっているのだ  
けど。

任期が一年なので、当然ながら三年生は候補になれない。紅葉ヶ  
丘学園は進学校でもあるわけだし、素直に勉強しておけ、というこ  
となのだろう。

もっとも、一流大学を目指すなら、任期満了後からではなく、も  
っと早くから勉強してないとダメな気もするけど。

ただ、内申のプラスにはなるだろうから、受験に不利とばかりは  
言えないのかもしれない。

生徒会長は今、プロジェクターでスクリーンに資料映像を表示し  
て、いろいろと説明を続けている。

それらの映像は、全員に配られた冊子に書かれてあるものだ。

こういった資料まで準備しているのだから、生徒会の仕事っての  
は大変そうだ。

どうやら内容としては、今年度前期の生徒会運営方針の再確認や  
現状報告、および予算案の修正、部活動や同好会活動に関する状況  
のまとめ、といったものらしい。

四月に新入生も入り、部や同好会の所属人数も確定したことで、  
同好会からの昇格や活動費の割り振りなども決まり、また、新たな  
部や同好会の発足なんかも含めて、いろいろと決定事項があるよう  
だ。

「いや、生徒会長、ほんと凜々しいな。お近づきになりたいよ  
な！」

僕の隣で、友雪が同意を求めてくる。

「また友雪はそんなことを……」

「でもさ、キリツとしてかっこいいとは思っただろ？ なんとって美人だし。無造作に首の後ろ辺りで束ねてるだけのシンプルな髪型も、その束ねているリボンが地味な紺色なのも、なぜか右側だけ異様なほど伸ばしているもみあげの毛も、どれを取ってもいい雰囲気 を漂わせてるだろ？」

「えーっと、そりや会長さんが美人なのは認めるけど、あのもみあげの感想は、人それぞれなんじゃない？ 変だって言ってる人もいたよ？」

「雫香様をつかまえて変だなんて、そんなこと言うヤツは、この俺がこらしめてやる！」

「雫香様って……。生徒会長の親衛隊にでも入ってるの？」

「入ってる！」

「……入ってるんだ……」

「毎週送られてくる冊子には、雫香様を隠し撮りしたお写真もたくさん載せられてるしな！」

「って、それ犯罪にならない!？」

『あ、コホン！ そこ、うるさいぞ！』

思わずバカ話に熱中して声が大きくなりすぎていた僕と友雪に、マイク越しの叱咤が飛んでくる。

顔を上げて視線を向けると、壇上の会長さんがこちらを指差していた。全校生徒の前で、注意されてしまったのだ。

「すみません……」

反省して肩をすばめる僕の横で、友雪は、

「会長さん直々に怒ってもらえるとは。俺はなんて幸せ者なんだろ  
う……」

と言いながら、うつとりした顔をしていた。周囲からもちらほら  
と、「いいなあ……」なんて声が聞こえてきてるし。

なんとというか、この学園の生徒、大丈夫なんだろうか？ 一応仮  
にも進学校のはずなのになあ……。

僕が友雪に呆れ顔を向けているあいだに、壇上ではなにごともしな  
かったかのように、会長さんが生徒総会の進行を再開していた。

さて、生徒総会があった体育館から教室へと向かって廊下を歩く  
道すがら。

まだ友雪は、「雫香様、いいよなあ。はあ、はあ」なんてつぶや  
いている。荒い息を吐くのは、さすがに怪しいからやめてもらいた  
いところだ。

そんな残念な親友を引き連れながら、教室へと戻ろうとしていた  
のだけど。

「そのキミたち、ちょっといいか？」

背後から凜とした声がかげられた。

「はい、なんででしょう？」

僕が振り向くと、そこにはなんと、生徒会長さんが立っていた。

「おおっ、雫香様！ ご機嫌麗しゅう！」

「ああ、ご機嫌よう」

隣では友雪が緊張の面持ちで体を硬くしている。傍若無人な友雪でも、萎縮することなんてあるんだな。

と、そんなことより。

会長さんに呼び止められた僕たち。

でも当然ながら、普段から会長さんとの接点なんて、あるはずもなく。

とすると考えられることは、ただひとつ。ついさっき、生徒総会でうるさくして怒られた、あの件しかないだろう。

そう考えた僕が謝罪の言葉を口に出すよりも早く、会長さんはまったく別の事柄について話し始めた。

「以前、旧体育倉庫の幽霊の噂があったが……」

「え？ ……あ、はい」

頭を下げる体勢に入っていた僕は、ちょっと拍子抜けしたけど、どうにか相づちだけは返す。

「その後、どうもそこに出入りしている生徒がいるらしいのだが……もし違っていたらすまない。それは、キミたちではないか？」

「あ……」

「どうやら昼休みや放課後のかなり長い時間、あの場所を占有していると聞いているのだが。間違いはないか？」

「えーっと、はい……」

確かに、会長さんの指摘に間違いはない。僕は素直に頷いておく。

「そうか。生徒会としては、いくら使われていないからといって、使用許可の出ていない場所を使わせるわけにはいかないのだが」

「はい、すみません」

結局は頭を下げる結果となった僕。

でも、どうしたものか。もちろん、幽霊の桜さんたちの話なんてしても、信じてはもらえないだろうけど……。

「なにをしているかは知らないが、生徒会としても強制的な手段は使いたくない。すぐに出ていけとは言わないから、少し考えてくれたまえ。それでは、失礼する」

そう言い残すと、くるりと反転し、会長さんは去っていった。

遠ざかっていく背中も、なんだかピシッとしていて、とても凛々しい。

「はあ、かつこよかった……。それに、すごく清々しくていい匂いだった……。雫香様の残り香、全部吸い込んでやる！」

さっきまでやけにおとなしくしていたと思ったら、友雪はまだトロンとした目のまま、突然鼻の穴を大きく広げて周辺の空気を激しく吸い込み始めた。

「やめなつてば、この変態！」

もちろん、僕がツッコミを入れたのは言うまでもない。

ただ、どうやら手遅れだったようで、

「やっぱりあの人たち、おかしいよ……」

「うん、そうだね。近づかないようにしよう」

廊下には、こちらへ白い目を向けた生徒たちのひそひ話の音が、無情にも響いていた。

放課後。

僕は会長さんから言われたことを、旧体育倉庫のみんなに伝えた。

「みんな、というのは、桜さん、華子さん、るなちゃん、響姫の、幽霊や物の怪たちだ」

「なんですって!？」

無意識に考えが声に出してしまった僕は、響姫まで物の怪扱いしたことで、その物の怪……じゃなくて響姫からヘッドロックを食らう。

「響姫、ギブギブ！ 息が出来ないってば！」

首を絞められると同時に、顔面が響姫のふくよかな胸に押しつけられていた僕は、息苦しくてたまらずギブアップを申し出る。

「……玲は締め技で、俺だと打撃技になるんだよな……」

友雪はなにやら不満そうだったけど。

解放されてゲホゲホと咳き込む僕には、気にしている余裕なんてあるはずもなかった。

「そ……それはともかく、会長さんからそんなことを言われたんですのね。困りましたの……」

「こんなに居心地のいい場所から、出ていかなければならないの？」

「うらめしい……」

「るな、ここがいいのだ！」

幽霊三人組は、それぞれの思いを口にする。

「どうにかしないとね」

「せっかくだから、出ていかないで済むようにならないかしら」

「生徒会長直々に言われてしまったしな。抵抗するのは難しいんじゃないか？ ……それにしても雫香様、綺麗だったなあ。響姫とはえらい違…ぐえっ！」

響姫に対して失礼な発言を始めた友雪が、顔面にストレートパンチを食らう。目にも留まらぬ早業だった。

それにしても友雪って、どうしようもなく学習能力のないヤツだな。

「そんなこと言ったら嫉妬されて殴られるのは、自明の理じゃないか」

「し…嫉妬じゃない！ あんたはどうしてそう…。いいわ、もう。なんでもない！」

なにやら響姫の怒号の矛先がこっちにまで向かってきたけど、いたいなぜなのやら、僕にはまったくわからなかった。

「あ…生徒会といえば、旧生徒会室で幽霊騒ぎがあったのが原因で、今の生徒会室のほうに移動したと聞いたことが…」

不意に、華子さんがそんなことを語り出した。

「そうなんだ。……あれ？ でも、誰から聞いたの？」

トイレの幽霊である華子さんが、世間話をしている姿が思い浮かばず、思わず尋ねる僕。

ちよつと失礼だったかもしれないけど。

「数日前だったかな……トイレで話してるのを聞いたの……。鏡の前ですつとお喋りしてるような人も多いから……」

なるほど、女子トイレだし、そういうこともあるんだね。

でも、どうでもいいけど、それって盗み聞きというのではなからうか。

「旧生徒会室か……。噂には聞いたことがあるような気もするが……」

「そうね。いつ頃変わったのかしら？」

「僕たちが知らないってことは、数年くらいは経ってるはずだよな？」

「そうだろうな」

「その場所って、今はどうなってるのかな？」

「それじゃあ、先生にでも訊いてみようか」

こうして僕たちは、担任の先生に会うため、職員室へと向かうことにした。

メンバーは僕と友雪、響姫の三人。

目指すは僕と友雪のクラスの担任、みずさきあんな水崎杏奈先生だ。

響姫のクラスの担任は新任の男性教諭だから知らないだろうと考え、僕たちの担任に尋ねることにした。

それなのに響姫もついてきているのは、僕たちふたりでは心配だ

から、とのことだった。べつに響姫がいたって、あまり変わらないと思うのだけど。

桜さんには、華子さん、るなちゃんと一緒に、旧体育倉庫で待つてもらっている。

大正時代風の衣装に身を包む桜さんがいると、さすがに怪しまれる可能性が高いだろうと考えたからだ。

「あら？ あなたたち、まだ残ってたの？ 部活にも入ってなかったわよね？ 用がないなら早く帰りなさい」

職員室で資料整理をしていたらしい先生のそばに歩み寄るなり、僕たちはその声をかけられた。

響姫もついてきてはいたけど、僕たちふたりの別クラスの友人だと、すぐに判断したのだろう。

「アンナ先生、質問があるんですが」

友雪が珍しく真面目な顔で先生に話しかける。

僕たちの担任は、二十八歳の化学教師。生徒たちから「アンナ先生」と下の名前で呼ばれて親しまれている。

ぱつと見は、ぴしっと張りついたような黒髪のショートカットと切れ長の目のせいで、ちょっとお堅い印象を受けるけど、冗談も言うし、たまにちょっとしたドジを踏んだりもするし、なかなか馴染みやすい感じの先生なのだ。

ちなみに独身なので、見境のない友雪は普段から色目を使ったりしている。

「へえ、阿久玉くんから質問なんて、珍しいわね。綾鶴くんなら

ともかく。……それで、どうしたの？」

こうしてアンナ先生から聞いた情報によると、どうやら幽霊騒ぎがあった旧生徒会室は、特別教室棟の一角、理科室の奥にある、今は空き部屋になっている小さな教室とのこと。

学園内には少子化の影響もあつてか、使われていない教室が結構あつたりするのだけど、そのうちのひとつだった。

そうやって使われていない部屋は、一部は部室などとして利用されている場合もあるけど、放置されて物置的な役割になっている場所も多いようだ。

ただ、その部屋を調べたいと言うと、さすがに難色を示すアンナ先生。

普段からカギがかけられていて入れない場所だし、自分では入出許可を出せないという。

「ありがとうございます、アンナ先生。それでは、お礼に口づけを……」

話を聞き終え、失礼しますと言って立ち去ろうとした際、いつもの茶目っ気かはたまた本気なのか唇を突き出して先生に顔を近づける友雪には、もちろん響姫からの顔面パンチが炸裂。

一瞬にして白目をむき、友雪は地べたに転がった。

「お騒がせしました」

「……阿久玉くん、お大事にね……」

にこにこ笑顔を振りまく響姫によって、ボロ雑巾のようにずると引きずられていく友雪を、アンナ先生は苦笑まじりに見送っていた。

「どうしようか？」

廊下を歩きながら、僕たちは作戦を練る。

アンナ先生の話によれば、空き教室に入る許可が出せるのは学年主任以上の先生だけで、なおかつ、それ相応の理由を示す必要があるらしい。

クラス行事なんかで使うという理由でも許可される場合はあるけど、今の僕たちにその手は使えない。  
とすると……。

「頼れるとしたらやっぱり……」

なにやらニヤケ顔の友雪。その表情から、なにを言いたいのか、よくわかった。

『生徒会長！』

僕と友雪が声を合わせる。

そんな僕たちの様子を、響姫はジト目で見つめ、ため息ひとつ。

「……ま、いいけど。確かに、それが一番よさそうね。旧体育倉庫を使ってる件も、話しかける口実になるでしょうし」

肯定しながらもジト目のため息をこぼしていたのは、また友雪が会長さんと響姫を比較しそうだから、という思いもあるんだろうな。

そんなわけで僕たちは一路、今現在使われているほうの生徒会室へと向かった。

僕たちが廊下を歩いていると、その生徒会室から、ちょうど会長さんが出てくるところだった。

「すみません、会長さん」

迷わず声をかける僕。……だけど、このあと、どうしよう？

なにも戦略を考えることもなく、会長さんを目の前にしてしまった状態。

マズった。途中で作戦会議でもしておくべきだった。

「おや？ キミたち、どうしたんだ？ 旧体育倉庫使用の件、もう考えてくれたのか？」

「栗香様、またお会いできて光栄です。忙しいところ失礼します。旧体育倉庫の件はまだなのですが……。実は俺たち、ついさっき、旧生徒会室の中から奇妙な音がしているのを聞いたんです。それで、中を調べてみたいと思うのですが……」

会長の言葉を受けて、友雪がとっさの判断で口からでまかせを繰り出す。

「ほう、怪しい音が。それは気になるな」

会長さんは、疑うことを知らないのか、真剣な表情で考え込む。

「思案する雫香様の姿も、お美しい……」

「またあんたは！ …… 会長さんはお忙しいでしょうから、あたしただけで調べます。ですので、カギだけ用意していただけますか？」

うつとりとした視線を会長さんに向ける友雪のすねに軽くつま先蹴りを入れつつ、響姫が友雪の嘘を受け継いで話を合わせる。

カギだけを用意してもらおうとしたのは、桜さんも連れていくことになるし、会長さんが一緒では問題があると考えたからだろう。でも会長さんは、短く一考したあと、

「いや、キミたちだけで危険があるかもしれない場所に入らせるわけにはいかない。私も一緒に行こう」

と宣言した。

カギは会長さんが学年主任の先生から借りてきてくれることになった。旧生徒会室前に集合することにして、僕たちは一旦、会長さんとは別行動を取った。

旧生徒会室には幽霊がいるかもしれない。

だから、桜さんを連れていく必要がある。僕たちだけ行っても、出てきてくれない可能性があるからだ。

僕たちは旧体育倉庫へと戻り、桜さんに状況を説明した。

そしてこれまでどおり、華子さんとなるなちゃんをお留守番として

残り、桜さんには僕の肩につかまってもらって、目的地へと向かう。

もちろん、0コンも持ってきている。

ポケットの中に入れておくとはいえ、結構な大きさがある0コンは、会長さんに不思議がられるかもしれないけど……。

それよりも、桜さんの存在をどう説明するかのほうが問題だ。

「制服も着てないしな。さすがに怪しまれるか」

「うーん、そっだよな」

「……だったらさ、玲のいとこの中学生ってことにすれば？ 来年受験するから、見学に来たって言えば、ごまかせるんじゃない？」

「うーん、そうかな……？」

ちょっと無理があるような気がしなくもないけど、さっきの友雪の嘘にも疑いを持たなかったようだし、案外簡単に騙せてしまうかもしれない。

旧生徒会室だった空き教室の前にたどり着くと、すでに会長さんが待っていた。

「遅れてすみません！」

「いや、大丈夫。私も今着いたところだ。……ところで、その子は誰だ？ この学園の生徒ではなさそうだが」

「いとこの中学生なんです。来年受験するので、見学しに来たらしくて。こんな急に来るなんて、ダメじゃないか、桜」

「ごめんなさいですの、玲お兄ちゃん」

若干のアドリブを加える僕に、桜さんも話を合わせてくれる。

「……そうなのか。だがそれなら、こんな辺ぴな場所ではなく、他のところを回ってきたらどうだ？」

「オカルト好きなんで、奇妙な音の話をしたら興味を持ってしまつて……」

「そうか、なら仕方がないな。まあ、こんなところを調べても、なにもないと思うが」

なんというか、やっぱりあっさり信じてくれたようだ。

今の僕たちにとっては助かるけど、こんな簡単に嘘に引っかかるようだ、生徒会長としてかなり心配な気がする。とてもしつかりした生徒会長のイメージは、脆くも崩れ去ってしまった。

もしかしたら、今の生徒会長ちよるいぜ、とか言われて、生徒の悪巧みに引っかかってしまう、なんてこともあるかもしれない。

まあ、副会長さんや他の役員がしつかりサポートしてくれるだろうし、問題ない……かな？

ともかく、会長さんがカギを開け、僕たちは旧生徒会室へと足を踏み入れた。

中は、さすがに何年も使われていないだけあって少々ホコリっぽくはあるものの、会議テーブルやパイプ椅子、ホワイトボードなどが整然と並べられていて、綺麗な印象。

棚に並べられた資料や本なども、きつちりと乱れることなく並んでいた。

ロッカーや棚の上にもダンボールにまとめられた資料などがそのまま残されているようではあったけど、それらもよく整理整頓された状態のように見える。

これで何年も使われていないなんて、信じられない。

「響姫の部屋なんて、数日で爆発したみたいになるのにな」

「余計なお世話よ!」

友雪が余計なことを言っただけで殴られていたけど、否定しなかったってことは、自覚はあるのかな、響姫。

僕は響姫と幼馴染みだから、彼女の部屋には何度も入ったことがある。

友雪も、中学からの知り合いとはいえ、なんだかんだで僕と一緒に遊びに行ったりしていた。

そうやって人が遊びに来る場合、部屋の掃除くらいはするものだと思う。だからきつと、響姫だつて掃除はしたのだろう。

それでも彼女の部屋は、僕から見てもちょっと汚く思えるような状態であることが多かった。

友雪の言ったような、爆発したみたいなお部屋というのは、さすがに言いすぎだと思うけど。

「はっはっは、仲がいいようだな、キミたちは。まあ、生徒会なんかに入る人間は、真面目で几帳面なヤツが多いからな。生徒会室だつて、綺麗に使われるのが普通だろう。もつとも、真面目すぎて面白味のない人間、とも言えるかもしれないが。……なんて、私も人のことは言えないか」

自嘲気味に会長さんが笑う。

口を動かしながら、手もすっかり動かし続けているあたり、さすがは生徒会長と言っべきか。

会長さんだけでなく、僕たちも手分けして室内をくまなく調べて

みる。

といつても、資料などは綺麗にまとめられてあつたし、さほど時間をかけることもなく調査を終えることができた。

「なにも……おかしなところなんて、ありませんね」

「ああ、そうだな。棚の中もロッカーの中もダンボールの中も、これといつておかしな部分はない。奇妙な音がしたというのは、本当なのか？」

ここにきてようやく疑問に思い始めた会長さんだつたけど。

友雪の嘘だつた奇妙な音の原因は当然としても、幽霊だとかそれに類するもの、その痕跡などを含め、僕たちはなにも見つけ出すことができなかった。

るなちゃんを見つけたときと違い、桜さんの幽霊アンテナにも反応はない。

「うむ。やはり問題ないようだ。骨折り損ではあつたが、これですっきりしたな。では、これにて解散するでしょうか」

やがて、会長さんが軽くひとつ頷き、場をまとめるようにそう提案した。

それに頷く五人。

……つて、あれ？ 五人？

そこで不意に疑問符が浮かぶ。

会長さん以外に今この場所にいるのは、僕、友雪、響姫、桜さんの四人だけのはずなのに……。

僕は自分を筆頭に、指先をそれぞれの相手に向けながら、各々の名前を呼んでいく。

「僕、友雪、響姫、桜さん、会長さん……で、キミは、誰？」

メンバーの中にもうひとり、知らない顔が紛れ込んでいたということに、僕たち一同はここでようやく気づいたのだった。

「私は、市井優美いちいすくみと申します。この学園の、生徒会長を務めさせて  
いただいております。以後、お見知りおきを」

両手をスカートの前で組み、ぺこりと会釈する彼女。

ヘアバンドで軽く押さえてはいるけど、おでこを出しているわけ  
ではなく、自然に流れた前髪がさらりと揺れる。ウェーブがかつた  
髪の毛はポリウーム満点で、背中のにままで伸びていた。

清潔そうな制服のブラウスは一点の曇りもないほど白く、胸のり  
ボンもしっかりと形が崩れることなく留められている。

それにしても……。

「生徒会長……?」

僕のつぶやきに、優美さんは、

「ええ、そうですわ」

にこっ、と温かな笑顔を向け、迷うことなくそう言いきった。

「嘘をついているようには思えないよね……。とすると……」

ちらり。

僕は視線を会長さん 湯浴先輩のほうに向ける。

すると、僕の視線で誘導されたかのように、友雪が困惑の表情で  
叫んだ。

「雫香様！ あなた、二セモノの生徒会長だったんですか！？」

「ど……どうしてそうなる！？ 私はホンモノだ！」

「いいえ、私が生徒会長ですわ！ その方、どうしてそんな嘘をつくんですか！？」

「嘘ではない！ 私は本当に生徒会長なんだ！ お前こそ、なぜそんな見え透いた嘘を！」

取っ組み合いのケンカでも始まるのではないかという勢いで、お互い一步も引かない両者。

もちろん僕は会長さんをちょっとからかう程度のもりで、友雪をけしかけてみた感じだったのだけど。

なんだかシャレにならないほどにまで熱くなってしまったようだ。

「どうなってるの……？」

響姫もどうやら困惑を隠せない様子。

友雪も響姫も、僕たちがこの場所に来た当初の理由をすっかり忘れていたのではないだろうか。

「えっと……」

控えめに一步前に踏み出し、間違はなく今この場で一番落ち着いている桜さんが、互いに怒鳴り合いを続けている生徒会長ズに声をかける。

「優美さん……もしかしたら気づいていないかもしれないので、率直に言わせていただきますの。あなた……」

「え？ なんですか？ 私は、生徒会長としてずっと生徒のみなさんのお役に……そして……う、ぐ……ぐあヴヴヴウ！」

桜さんの言葉を遮って語り出した優美さんは、やがて頭を抱え、うなるような声を発し始めた。

「……思い出してくださいですの。それはとても、苦しくて悲しい過去かもしれないですけど……」

両手を目の前に組んで懇願する……というよりは、お祈りをするかのように、桜さんは慈愛を込めた言葉を優美さんに送り続ける。

優美さんのうなり声は、徐々に小さく弱いものへと変わっていき、数瞬ののちには、完全に消え去っていた。

「……そうでした。私は……死んだんですわ。もう、何年も前に……」

どうにか吐き出した独白によって、自らも平静を取り戻したのだろう、優美さんの顔からは穏やかさが感じられるようになった。

「生徒会の仕事が残りで、ここに幽霊として縛られてしまったんですのね」

「ええ……」

まだ揺らいでいた記憶を完全に取り戻すべく放たれた桜さんの最後の言葉に、優美さんは大きく頷いた。

優美さんが落ち着きを取り戻すと、もう少し詳しく話を聞くことができた。

この教室ですつと幽霊をやっていたものの、誰も来なくなつて消えかかっていたところ、突然、久しぶりにドアが開けられ、僕たちが入ってきた。

あまりに久しぶりの来客で嬉しくなつた優美さんは、すぐに僕たちの中に紛れ込んだのだという。

「わたくしたちが気づかなかつたのは、優美さんの霊力の影響もあつたと思いますの」

桜さんはそう語る。

「あれ？ 霊力といえば、さっき桜さん、幽霊アンテナが立ってなかつたけど……」

保健室でるなちゃんを探したたいたとき、霊気を感じて髪の毛がピンと立っていた、あの幽霊アンテナ。なんで今回は立っていないなかつたのだろうか？

疑問を口にする、

「あれは、見えない状態の幽霊を探す場合にだけ反応するんです。完全に姿を現して紛れ込んでいては、反応なんてしませんですの」

との答えが返ってきた。うーん、そういうものなのか……。

「ま、なんにしても、これで三人目だな」

「お友達も増えて、よかつたわよね！」

友雪と響姫が明るい声を響かせると、優美さんは控えめに顔を上げる。

「お友達……？ 私と、お友達になってもらえるんですか？」  
「もちろんですよ！」

満面の笑みで応える桜さんに、優美さんもまた、こぼれ落ちんばかりの笑顔を咲かせるのだった。

と、ふと気づいた。さっきから会長さんが静かだということに。会長さんは雫香という名前だけど、そんなに静かな人でもないはずなのに……。

失礼なことを考えつつ、僕が辺りを見回すと、部屋の片隅で会長さんは頭を抱えてうずくまっていた。

どうしたんだろう？

しかもなにやら、ブツブツとつぶやいているような……。僕が心配して近寄ると、会長さんのつぶやきも、はっきりと聞けるようになった。

「これは……夢……。みんな、夢だ……。この世に幽霊なんて、いるはずがない……。全部幻覚なんだ……。だから、怖くない、怖くない……」

……どうやら会長さん、幽霊が怖いようだった。

いや、まあ、普通に考えたら怖いものだとは思っけど。

それにしても、あの会長さんが 雫香様なんて呼ばれて憧れの的となっている彼女が、幽霊が怖くて部屋の隅でぶるぶる震えているなんて。

なんだか、ちょっと可愛くて、微笑ましく思えてしまった。

そう思ったのは、僕だけではなかったのだろう。

そして、ちょっとした茶目っ気を出してしまったのだろう。

「わっ！」

ゆっくりと静かに会長さんの背後に忍び寄った友雪が、突然彼女の背後で大声を出し、驚かせるという行動に出た。

「わびっ！」

変な悲鳴を上げ、飛び跳ねるようにその場で立ち上がる会長さん。だけど……。

立ち上がったまま、なにも言わない。会長さんの体は、小刻みに震えているように見えた。

顔を真っ赤にしてうつむいてるし、怒ってるのかな？

僕はそう思ったのだけど、それが間違いだったと、すぐに気づく。

じわっ……。

会長さんの足もとの床には、なにやら水溜まりのようなものが広がりはじめ……。

って、これは……！

「あ……えっと、その……僕たち、なにも見てませんから！」

慌てて会長さんに背を向ける。

「ちょっと、男子は外に出てなさい！」

響姫は僕と友雪の背中を押して、部屋から外に追い出した。

廊下に追い出されたから、そのあとの状況は僕にはよくわからなかったけど、泣きじゃくる会長さんを桜さんがなだめながら、響姫がいるいと世話……というか、処理をしてあげているようだった。

どうにか処理を終えたのは、それから結構な時間が経ったあとだった。

そして、僕たちはこの場所であったことは絶対に口外しないという約束を交わし、代わりに、旧体育倉庫から出ていくという件について当面のあいだ保留としてもらうことにも成功した。

なんとというか、会長さんを脅迫したみたいで、ちょっと心苦しい気がしないでもなかったけど……。

翌日、僕たちは昼休みに、また旧体育倉庫に集まっていた。  
ただ、今日はこれまでとちよつと違う。

昼休みになつてすぐにごこへ来ると、どうしても昼食抜きになつてしまう。というわけで、朝、登校の途中でコンビニに寄つて食べ物と飲み物を買つてきてあつたのだ。

飲み物はさすがにぬるくなつてしまつているけど、まだ真夏でもないから、さほど気にはならない。

同じように、響姫にもお昼を用意してくるように連絡してあつた。ということをお桜さんに言つて、早めに食べるからちよつと待つてほしいと伝えると、

「それなら今日は、お昼を食べながらのお喋りタイムにしましょう  
」！

ポンと両手を合わせて、彼女はひまわりのような笑顔を輝かせた。

「お友達とお喋りしながらのご飯、これも学校の醍醐味だと思いま  
すの！」

そこまで言われたら、僕たちに否と答える理由はない。

ただ、幽霊つてご飯を食べるのかな？ という疑問だけが、ちよつとだけ心に引っかかつてはいたのだけだ。

そして、食卓を囲む僕たち。

食卓といっても、当然ながら旧体育倉庫にある会議テーブル。さすがにフキンで拭いたけど、ホコリっぽいことには変わりない。

そんな中で昼食をいただくなんて。

しかも、総勢四名の幽霊と一緒に……。

はたしてどんな団らんの時間になってしまうのやら。

そう思いながらも、僕は自分のお昼ご飯を会議テーブルの上に広げる。

菓子パンふたつと惣菜パンひとつ、それに紙パックのカフェオレ。それが僕の昼食メニューだった。

友雪も僕とたいして変わらず、菓子パンふたつに、プラスチックパックのミニつけ麺、紙パックのコーヒーといった感じ。

ま、コンビニで買ってきたら、この程度だよな。

そんな中。

意外にも響姫は、ちょっと小さめながら可愛らしく彩りも鮮やかなお弁当を持ってきていた。

鳥のそぼろがかかったご飯に、厚焼き玉子、小さめのから揚げ。ウインナー数本はタコさんの形に切っており、健康のためか野菜サラダも添えられている。あとは苺がいくつか、デザートとして乗せられているようだ。

「おっ、響姫のお母さん、料理上手みたいだな！ 美味しそうだ！」

パンを片手に持ちながら、友雪が感嘆の声を上げる。

「美味しそうって思ってくれたのは嬉しいけど、言っとくけど、これ、あたしが作ったのよ？ たいしたおかずじゃないけど……」  
『えええっ！？』

僕と友雪の声が重なる。それどころか、桜さんたち幽霊のみんなまで、驚きの表情を見せていた。

「響姫、料理できたんだ……」

「し……失礼ね！ 当たり前でしょ？」

「嘘だ……響姫は絶対、鍋を爆発させるような人間だと（もぐ）、思ってたのに（もぐもぐ）」

「そんなヤツ、いないわよ！」

バシッ！

いい音を響かせて、響姫の正拳突きが見事に友雪の顔面にヒットする。

だけど、口にパンを含んでいる状態の相手を殴るのはリスクが伴うというのを、響姫は完全に失念していたようだ。

「うぐぼわっ！」

思いつきり殴られた友雪は、咀嚼してただ液まみれのパンくずを、口から吐き出してしまっ。

正拳突き……ということとは、真正面からの攻撃だったということだ。

友雪が吐き出したパンは、見事、響姫の顔面にベチャリ。

「ぎゃっ！」

女の子らしくない悲鳴を上げようと状況が変わるわけもなく、そ

れどころか、顔面にぶつかったものの貼りつかず、そのまま落下したパンくずは、狙い済ましたかのように響姫のお弁当の上へとその身を躍らせた。

「汚ったな〜い！ うわ、お弁当にまで！ あ〜ん、これじゃもう、食べられないじゃない！」

ハンカチで顔面を拭きながら、響姫は文句たらたら。原因を作ったのは響姫自身なんだけどねえ。

「仕方ないわね、あんたたち、罰としてパンをひとつずつ、あたしによこしなさい！」

どついうわけか、僕まで被害をこうむってしまった。

問答無用でパンを奪われた僕と友雪。すると友雪がこう言った。

「それなら、俺が食べていいか？ その響姫の手作り弁当」

「え？ ……べ、べつにいいけどさ……」

「悪かったな、響姫」

「……うん」

ずっと、響姫のお弁当を自分のほうへと引き寄せる。

「んじゃ、玲。お前も一緒に食おうぜ」

「え？」

さっきのパンで、友雪のだ液まみれになったお弁当を？

と思っただけど、まあ、たいして気にするほどベツタリついているわけでもないし、だいたい表面以外は被害を受けていないだろう。

そう考えれば、パンでお昼ご飯を終えるより、お弁当をいただけ

るほうありがたいと言える。

「俺は割り箸も持ってきてるが、玲はないだろ？ お前は響姫の箸を貸してもらって食べ」

「あ、うん。それじゃ、そうするね。響姫、借りるよ？」

「あつ……うん……うん……。……でも、すでにちよつと食べてたから、あたしが使った箸……はう、これって、間接キス……」

響姫のやつ、耳まで真っ赤になってるけど、どうしたのかな……？

なんだか、幽霊の四人が（幽霊のくせに）生温かな視線を向けてきているような気もしたけど……。

ともかく、そんなこんなで、僕たちは昼休みの前半を過ごしたのだった。

さて、昼休みも半分くらい過ぎた頃。

僕と友雪はまだお弁当を食べている途中。響姫もまだパンを頬張っていた。

それまでは黙って僕たちの様子を見ていた、桜さんを初めとする幽霊たちだったのだけど。

「見ているだけでも微笑ましくていいですけど、そろそろわたくしたちも、会話に参加させてもらいたいですの！」

桜さんがそうお願いしてくるので、ここから幽霊たちの昔話タイムが始まることとなった。

「ボクは生前、二学期の途中にこの学園に編入してきたの……」

最初の語り手は、華子さんだった。

長いストレートでサダコのような容姿だからなのか、単純に幽霊だからなのか、どう考えても怪談にしか思えないのだけど……。

まだ真っ昼間な上、今日の気温は高めで、冷房が必要なほどではないにしても、運動しなくてもちよつと汗ばむくらいの陽気のはずなのに。今この旧体育倉庫の気温は、いきなり氷点下までクールダウンしてしまったかのようにだった。

僕の横では友雪が、斜め前では響姫が、両手で二の腕の辺りをさすり、歯をガチガチと鳴らしている。

そんな中、話している当人である華さんは、実に楽しそうだった。

もちろん前髪で両目まで隠している華さんだから、笑顔になっているのかはわからない。

ただ、無意識なのか、時おり彼女の口からこぼれ出す、

「ふふふふ……」

という笑い声が、おそらく話すことを楽しんでいるのだと想像させてくれた。

もつともそれ以上に、僕たちにとっては恐怖心をあおる効果が発揮されているということに、華子さんを初めとする幽霊陣は気づいていないのだろうけど。

僕たちが背筋を凍らせていようともお構いなしに、華子さんの話は続く。

「前の学校でも、あまりクラスに馴染めていたわけではないけど、こっちではさらに輪をかけてひどくなってしまうって……」

……いきなり雲行きが怪しくなってきた内容に、僕たちの箸は完全に止まってしまふ。

響姫はパンだけになっているから、箸ではなく口の動きが止まっていたわけだけど。ほとんど噛まずに飲み込んでノドに詰まったりしないか、ちよつと心配だ。

「最初は無視からだつた。でもだんだんと、ちよつかいを出してくる人が出てきて。ノートや筆箱を隠されたり、暴力まで振るわれたり……男女問わず、ボクのことをいじめるようになってしまった……」

……。

「先生は見て見ぬふり。誰にも助けを求められなくて……。家庭も冷めきつていて、離婚問題で揺れていたのも原因だったかもしれないな……。ボクの親権を、どちらが持つか……。両親とも、ボクの親権なんて、持ちたくなさそうだったし……」

……。

「ボクが自分のことを『ボク』って言うようになったのは、クラスメイトのいじめが原因だったの……。下僕の『ボク』だからって、強要されて……。あ、玲くんが僕って言うてるのは、語源がどうかはともかく、普通のことだと思うから気にしないでね……」

.....  
悲しい過去を語っているのに、僕の心配までしてくれるなんて...  
...

「クラスメイトからのいじめに涙する毎日が続いたある日、泣き疲れたボクは屋上にひとりたたずんでいたの。一面の青空……。見事な快晴だった。ボクを受け入れてくれるのは、この青空くらいしかないのかな。そう思った……。ボクはゆっくりと歩を進めて屋上のへりに立って、そして」

「も……。もういいよ！ ごめんなさい、辛い記憶を思い出させてしまっ……！」

響姫が、耐えきれなくなったのだろう、両目に涙をいっばいに溜めながら悲痛な叫び声を上げた。

「え……？ ボクは自分のことが話せて嬉しかったんだけど……」

華子さんは、しゅんとしてしまった。

でもさすがに、僕たちもこれ以上聞き続けることはできなかったので、話は中断してもらおうことにした。

「うつつ、話を中断させられるなんて……。うらめしい……」

最後の最後に、口癖である『うらめしい』が出てしまう結果になってしまったけど、ここは仕方がないと思って諦めてもらおうかないだらう。

「じゃ、次はるなだな！」

続く挑戦者は、るなちゃんだった。るなちゃんの明るい口調なら、怪談になるような心配はいらないだろう。

なんて高をくくっていたのだけだ。

「るなは保健のセンサーだったのだ。ふつーにマジメに仕事してたのだ。そしたらなんか、毎日のように保健室に来る男子生徒がいてな。本気なんだ、って告白されたのだ！」

こんな幼女チックなるるなちゃんに告白するなんて、なかなか思いきったことをする生徒もいたものだ。

「でもなー、センサーと生徒のれんあいとは問題視されてな。緊急職員会議にかけられてしまったのだ。結果として男子生徒は退学、るなは停職ののち、教育委員会へも報告されることになってな！」

む……………？

「男子生徒と一緒に逃げようと言ってな。るなは頷いたのだ。るなも好きだったからな。ふたりきりでの最初で最後の旅行気分だったんだけどな。最終的には追いつめられたのだ。日本海側のどこかだったかな。逃げられないと悟った男子生徒とるなは覚悟を決めてな、崖から荒波に身を」

……………。

軽く明るい口調のままではあるのに、るなちゃんの話はとても重

い内容だった。

もういいから、と、るなちゃんの話を中断させたのは、言うまでもない。

続く語り手は優美さん。

今までの流れからすると、なんだか嫌な予感はしていたけど……。その予感はやっぱり的中してしまう。

「私は昨日お話ししましたように、生徒会長を務めておりました。自分で言うのもなんですが、全校生徒から頼りにされる優秀な生徒会長でしたわ」

ふむふむ。自分でそう言えるくらいだから、相当優秀だったのだろう。

「完璧を目指す私は、いつでもどこでも気を緩めることなく、優秀な生徒会長を演じておりました。それは生徒会長選挙で当選してから三年生になって任期満了する少し前まで、ずっと続きました」

ふむふむ……。

「生徒の皆さんからは大変そうと言われていましたが、私はべつに大変だとは思っていませんでした。それが当然のことだと思っただけです。……」

ふむふむ……。

「ですが、もうすぐ任期も終わるといふ時期になって、少々体調を崩してしまつた私は、最後の生徒総会でミスをしてしまいます。資料の作成が間に合わなかつた上、一年間にわたる生徒会活動の終了報告の発表において言葉に詰まり、さらには高熱で倒れてしまつたのです」

ふむ……………。

「もちろん、誰もそれを責め立てたりはしませんでした。皆さん、よく頑張つたと言つてくれましたわ。ですが、完璧を目指す私にとつて、それはあつてはならない汚点でした」

ふむ……………？

「思い詰めた私は、こう考えました。死んでお詫びしなければ、と……………」

え……………？

「そして私は当時の生徒会室で、カッターを使って手首を……………」  
「わ……………！ もう、そついう話はいいつてば……………」

慌てて話を止める僕。響姫がなんだかゲツソリとしていたし……………  
…すでに手遅れだつたとは思つけど……………」

「最後はわたくしですの」

そして桜さんが喋り始める。

僕はさすがに止めようとしたのだけど、彼女の過去が語られることはなかった。

「……と言いたいところですけど、実はわたくし、昔のこと、なにも覚えていませんの。ですから、お話できません。ごめんなさいですの」

控えめに頭を下げる桜さんに、僕たちはホッと安堵の息を吐き出しました。

そして昼休みは終わった。

一応食事を取ることはできたけど、お昼時の会話ではなかったかな……。

それに桜さんたちは、結局なにも食べなかったと思うけど……。  
そうつぶやくと、桜さんは笑顔で答えてくれた。

「いいんですの。幽霊にとって、人間さんの恐怖心とか悲しみとか、そういう負の感情がご馳走になりますから」

「え……」

「わたくしたちは、しっかりとお食事させていただいていたんですのよ。ふふふふ……」

怪しげに笑う桜さん。彼女の背後では、他の幽霊三人も同じような笑い声をこぼしていた。

……怖っ！

背筋を強烈な寒気が走り抜けていく。

と思ったら、桜さんは一瞬で温かな笑顔に切り替えると、

「なんちゃって、ですよ。大丈夫です、取って喰ったりなんてしませんから」

と言って、ペろりと舌を出すのだった。

その日の放課後。僕たちはいつもどおり旧体育倉庫へと集まった。さて、今日もまた桜さんの友達探しを始めますか、と気合いを入れたところで、桜さん本人からこんな宣言が飛び出した。

「わたくし、たくさんの友達が出来て嬉しいです。お友達と一緒に  
お昼ご飯を食べるなんてことまで達成できて、玲くんたちには本  
当に感謝ですの」

ぺこりと一礼。

え……それって……。

「事実上の友達探し終了宣言、と受け取っていいってことか？」  
「はいですの」

友雪の言葉に、笑顔で頷く桜さん。

そっか、もう友達探しはしなくていいんだ。

これで呪われなくて済むってことだね。よかったよかった。

……それなのに、ちょっと寂しく感じてしまうのは、気のせいかな……？

それに、僕たちはお役御免ってことになるから、もうこの旧体育倉庫に来る必要はなくなるのかな……？

僕がなんとなく感傷に浸っていると、響姫が不満の声を上げる。

「え？ もういいの？ 生徒じゃないけど、問題を起こして辞職したあと、自殺した教頭の幽霊の話なんかも、仕入れてきたんだけど

……」

どうやら響姫のほうは、僕のような感傷とは違って、自分のせいかくの働きが無駄になる、ということに対しての不満みただけ。そんな響姫の言葉を聞いた桜さん。

びくつ。

なぜか一瞬だけ体を震わせ、微妙に考える素振りを見せたものの、再び笑顔に戻ってこう語った。

「……もう、大丈夫ですの。玲くんたちも来てくれて、とっても楽しい時間を過ごせました。お友達に囲まれて、夢みたいですの。でも、もうひとつ、わたくしには夢があるんです」

微かに潤んだ瞳を僕たちのほうへと向け、桜さんが語ったもうひとつの夢。

それは……。

「部活動をしてみたいんですの！」

……幽霊が部活動……。

結構な無理難題のように思えるその夢を叶えるため、どうやら僕たちには引き続き手伝ってほしい、ということのようだった。

「幽霊にだって人権はあると思いますの！ ですから部活動をする権利もあると思いますの！」

僕の両肩をつかんで、必死に訴えかけてくる桜さん。僕が尻込みしているのを感じ取ったのだろう。

べつに僕は桜さんの頼みを断るつもりなんてなかったのだけど……。

「いやいや、幽霊に人権なんてないだろ。人じゃないんだし。それに、今現在ここの生徒でもないわけだから、部活動に参加する権利つても」

友雪がごく当たり前の意見を述べ始めたけど、桜さんの表情が笑顔から悲しみへと徐々に変わっていき、さらには苦悶を通り越して怒りや恨みのどす黒い光を瞳に宿し始めているのを見て取り、途中で言葉を止めてしまった。

桜さんは覚えていなかったけど、他の三人の幽霊たちは、それぞれに悲しい過去を抱えていた。

そんな幽霊たちに、人権なんてないし部活動だって無理、だからすぐに成仏しろ、なんて言うのも酷というものだろう。

でも、だからといって、どうすればいいのか……。

「だけど、さすがにちょっと難しいんじゃないの？ どこの部だった、幽霊と一緒に活動なんて、怖がってしたくないと思うし……」

響姫が様子を見ながら遠慮がちに言う。

「そつだよね。どこの部だった、受け入れてくれないよね。と、そこでふと考える。」

「……だったら、幽霊のみんなで部を立ち上げればいいんじゃないかな？」

「幽霊だけで認められるわけないだろ？ ここの生徒じゃないんだ

から」

僕の意見に、友雪が速攻で反論してきた。でも、それならば答えはもう決まっている。

この学園は、部活動が強制参加じゃない。僕も友雪も、それに響姫も、いわゆる帰宅部の状態だ。

「だったら、僕たち三人も加わればいいんだよ」

「あ……勝手にあたしも加えられてる」

僕の意見に最初に反応したのは響姫だった。

だけど意外と不満な様子はなく、

「ま、ここまで関わったわけだし、最後まで協力するわよ。(……それに、もつと玲と一緒にいたいし……)」

と、快く協力を申し出てくれた。

後半はいきなり声のトーンが落ちて、ぼそぼそと口の中でつぶやく感じだったから、僕にはまったく聞こえなかったけど。

きつと、素直に協力するという自分のキャラじゃない行動に恥ずかしさがあつて、自分自身に言い聞かせているとか、そんな感じだろう。

さて、残るはひとり。

「友雪……」

僕が詰め寄る。

響姫や他の幽霊たちにも見つめられた友雪は、少し考え込むような様子を見せたけど、しばらくしてゆっくりと口を開いた。

「幽霊に人権なんてない」

「友雪……!!」

恨みがましい声で、僕は親友の名前を呼ぶ。

素直じゃないところや、自分勝手なところもあるというのは、三年以上のつき合いだから知ってはいた。それでも、なんだかんだ言っ  
て、友達思いのいいヤツだと、信じていたのに……!  
と、そのとき。

睨みつける僕に鋭い視線を返してきていた友雪が、ふっ……と、  
表情を緩ませる。

「……とは思うけどな。だが、桜さんたちは幽霊である以前に女の子だ。女の子のお願いは、なにがあっても断らない。それが俺のモ  
ットーだ!」

拳をぐつと握り、力説する友雪。

「だから、協力するぜ!」

「友雪! やっぱり友雪は友雪だったね!」

「ああ、俺は俺だ!」

よくよく考えると意味がわからない歓喜の声を叫びながら、僕と  
友雪はガツチリと握手する。

「ん〜、じゃあさ友雪。あたし、欲しいものがあるんだけど、買っ  
てくれる? 女の子のお願いは、聞いてくれるんでしょ?」

「ああ、響姫はダメだ。お前は女の子じゃな ぐべらっしゅ!」

響姫のお願いを学習能力のない理由で断った友雪は、みぞおちに

正拳突きを三連続で食らい、その場に崩れ落ちてしまった。

それはともかく、新しく部を作るといふ方向での作戦を練ってみる。

桜さんとしては、部活動という言葉に憧れがあるみたいで、同好会ではなく正式な部として立ち上げたいらしい。

同好会なら勝手に活動すればいいんだけど、部として活動するには条件がある。

まず、部員が五人以上必要。これは、僕たちと幽霊ズを合計すればクリアできているので問題ないだろう。

……幽霊が人数としてカウントされない場合、他の人を勧誘する必要が出てくるけど、今はとりあえず考えないことにしておく。

そして、部活動として認められる条件のもうひとつが、顧問の先生の存在が必要、というものだった。

「部活動として認められたら部室が与えられるし、会長さんに保留してもらってる問題も解決するね」

「でもさ、顧問の先生ってのはかなり問題じゃない？ 幽霊のいる部の顧問になんて、なりたい先生がいるとは思えないわ」

「そこは、幽霊だったのを黙って申請すれば大丈夫だろ」

「うーん……。バレないかな？」

「バレたら、あたしたちまで処罰を受けたりするのかしら……。」

……玲と一緒にいたら、どんな罰を受けたって耐えられるけど……」

「先生だって、全学年の生徒を把握しているはずがない。だから問

題ないだろ。もちろん、詳しく調べられたら終わりだが……」

「だったら、理解のあるアンナ先生が適任かな？」

「大丈夫なの？ あたしはクラスが違うから、アンナ先生のこと、そんなによくは知らないけど」

「ふっ。俺たちとアンナ先生の絆を甘く見ないでくれ。なにせ、何度も何度も呼び出されて、それこそ毎日のように顔を合わせて会話している間柄だからな！」

「うん、そのとおり！」

「……ぜんっぜん安心できないわ……」

自信満々の僕たちとは対照的に、響姫も、そして他の幽霊たちまでもが、はあくど、深いため息をこぼしていた。

アンナ先生のもとへ相談に行くのは、翌日の昼休みということに  
した。

桜さんを部長ということにしたかったため、一緒に連れていった  
ほうがいいだろうと考えた僕たち。

でも、桜さんはこの学園の制服ではなく、大正時代風の着物と袴  
といういでたち。ここはやっぱり制服に着替えておくべきだ。

ただ、桜さん以外の三人の幽霊に関しては、霊力の強さの問題な  
のか着ている服を脱いだりはできないらしく、優美さんの制服を借  
りるという手は使えなかった。

ちなみに華子さんは体操着姿、るなちゃんは白衣にタイトスカ―  
トだから、もし脱ぐことができたとしても使えなかっただろう。

だからといって、誰か女子の制服を盗んでくるなんて極悪非道な  
ことはもちろんできない。

響姫の制服を借りる、という手も考えたけど、以前アンナ先生に  
相談に行ったときと同様、僕と友雪だけでは心配という理由から却  
下された。

いろいろと話し合った末、響姫の三歳上のお姉さんがこの学園の  
卒業生で、去年まで着ていた制服を残してあるはずだから、それを  
響姫に持ってきてもらうということになった。

そんなわけで翌日の昼休みとなった今、僕と友雪は、桜さんが着  
替えるのを旧体育倉庫の前で待たされている。

「もついいわよー!」

響姫の声を確認し、僕たちは倉庫内へと入った。

「おおっ！」

途端に友雪が歓喜の声を上げた。

桜さんが制服を着ている。ただそれだけなのに、すごく雰囲気が変わっていて、なんだか新鮮に感じてしまう。

「いつもの服もいいけど、制服姿も可愛いよ、桜さん！」

わざとらしいくらいに囁し立てる友雪の言葉に、桜さんは頬を赤らめる。

もちろん、お世辞というわけではない。僕から見ても、桜さんはとても可愛らしく思えた。

普段が清楚で控えめな衣装だからか、ちょっと短めの夏服のスカートとか薄手の白いブラウスや胸のリボンが可愛らしさを際出させている。

「でも、えっと……」

もじもじしながら、恥ずかしそうにつぶやく桜さん。

「なんだか胸の辺りがすかすかで、不自然な感じですよ……」

言われてじっと彼女の胸の辺りを凝視してみると、確かにその近辺の布地は完全に余っている様子。

「あ〜。お姉ちゃん、あたし以上に胸が大きいからね〜」

「つつつつ……」

涙目の桜さんは、しばらくのあいだ、自分の胸に手を当て、「うらめしいですの」と繰り返すのだった。

僕たちは桜さんを引き連れて、急ぎ足でアンナ先生のもとへ向かった。あまりゆっくりしていると、昼休みも終わってしまうし。

さて、ここからが正念場だ。

アンナ先生を言いくるめ、もしくは味方に引き入れ、桜さんを部長とした僕たちの部を立ち上げるため顧問になってもらい、さらに許可を得る必要がある。

部の設立を許可してもらうには、生徒会に申請書を出して認めてもらうのが普通だ。

場合によっては、学園長の鶴の一声で決定されることもあるらしいけど、僕たちが学園長に直接お願いしたところで、無駄なのは目に見えている。

卑怯で心苦しくはあるものの、会長さんの弱みは握っているわけだから、生徒会長の権限で認めてもらえば大丈夫だろう。

ともかく、まずは顧問を見つけるのが最優先事項だ。

もしアンナ先生に拒否されたら、作戦は振り出しに戻ってしまう。そう思いながら、僕たちは緊張しながら職員室を訪れた。

「アンナ先生！ 今日もうなじがお美しい！ いい香りです！」

友雪が、いきなり作戦失敗に向かって一直線となりそんな発言と行動を取る。

椅子に座っているアンナ先生の背後に回り、首筋に顔を寄せて、匂いを嗅ぎ始めたのだ。

うなじでも美しいと言われたら嬉しいかもしれないけど、匂いまで嗅ぐのは、さすがにちょっと……。

というか、友雪にとっては、それ以前の問題があった。

ドガシッ！

響姫の鋭いエルボーが友雪の脳天を直撃！ 友雪は床に突っ伏し、ピクピクと痙攣を始める。

……ま、自業自得だ、放っておこう。

「い……いきなり、なんですか？」

「すみません、このバカが……。あっ、でもアンナ先生、ほんとうなじ、綺麗ですね！ それ、ネックレスですか？」

困惑しているアンナ先生に、代わって響姫が話しかける。

アクセサリーの話に持っていくあたり、さすが女の子といったところだろうか。

「ふふ、ペンダントになってるのよ。ほら」

「うわー、綺麗ですねー！ この白くて淡い色の石って、なんでしたっけ？」

響姫の話に乗ってきたアンナ先生は、自然と困惑顔から笑顔に切り替わる。

「ムーンストーンよ。思い出の品なの……」

「彼氏さんから貰ったんですか？」

「ふふ、元、だけどね……」

しまった、といった顔で僕のほうに視線を向けてくる響姫。どうやら、触れないほうがいい話題だったようだ。

アンナ先生が独身なのは響姫も知っていただろうけど、今の先生に男性の影がまったくくないということまでは知らなかったらしい。

元彼さんを思い出してしまったのか、アンナ先生は寂しそうな表情を見せる。

「そ……それより、先生！」

話題を変えるべく、僕は本来の目的を口にした。

新しい部を作りたい、ということ。

さて、どうなることか……と思ったけど。

「へえ、新しい部ね。いいんじゃないかしら。どんな部なの？」

意外となんの疑いも拒否もなく、受け入れてくれそうな反応を示した。

と、そこでまたしても、作戦のアラを発見する。

僕たちは部を立ち上げることだけを考え、どういった活動内容なのか、部の名前すらも決めずに、ここまで来てしまっていたのだ。

「え……と……」

言葉に詰まる。

そんな僕を、いつの間に復活していたのか友雪が手で制し、おそらく即興で考えたのであろう内容を披露し始めた。

「幽霊部です。幽霊に関する知識と理解を深め、みな仲よく、手  
手を取り合って研究に励む。そういった活動内容を予定しています」  
……………そんな部活、許可されるわけが……………。

「あら、じゃあその部のメンバーって、幽霊部員になるのね！ ち  
やんと毎日部室に足を運んで真面目に活動していても『幽霊部員』  
！ なんか、いいわね！」

よくわからないけど、アンナ先生のツボにはまったらしく、思い  
つきり食いついてくる。

「それで、アンナ先生に顧問になってほしいんです！」

せっかくのチャンス、無駄にするわけにはいかない。僕も友雪の  
話に乗っかり、必死で懇願する。

「そうね……………化学部とのかけもちにはなるけど、私でよければ顧問  
を務めさせてもらおう」

「ありがとうございますの！」

いつものように僕に寄り添いながら、桜さんが頭を下げる。

「あなたが部長さん？」

「はい！ 隼木桜です！ よろしくお願いしますの！」

「隼木さんね。会うのは初めてだと思うけど……………なんだか、どこか  
で聞いたことがある名前のような気も……………」

桜さんが名乗ると、ちょっと考え込む仕草を見せるアンナ先生。

「とりあえず、顧問決定でいいんですよね？　じゃあこれから僕たち、生徒会に申請しに行つてきます！」

なにを考え込んでいるのかわからなかったけど、余計なことを思ひ出される前に行動に移すのが得策だ。

そう判断した僕は、急いでまくし立て、職員室を去ろうとする。

「あゝ、それなら私から、直接学園長に申請して認めてもらつておくわ。ちよつどこれから会う予定だし。申請書もここにあるから、この紙に部の名前と活動内容、部長を筆頭に初期メンバーの名前を記入してね」

思つてもみなかった追い風。

あまりにも事が上手く運びすぎて怖い気もしたけど、せつかなので先生のお言葉に甘えることにした。

「部長を含めて部員は七人いるのね。五人以上だし問題なし、と。顧問の欄は私が書くから、空けておいていいわよ」

新規部活動申請書と書かれた紙に、響姫が代表して必要事項を記入していく。

響姫が一番、字が綺麗だからだ。見かけによらず。

部長である桜さんが書くべきかだったかもしれないけど、Oコンで操作していない状態の今、僕に触れている必要があるため、用紙を押さえながら文字を書くということはできなかった。

Oコンはポケットに忍ばせてあるものの、アンナ先生に怪しく思われるだろうし、ここで桜さんを操るのは断念した。

「あつ、そうそう。部室はどこにする？　空き教室だったら、大抵どこでも申請した場所を使わせてもらえらると思うけど」

「旧体育倉庫でお願いしますの」

アンナ先生の質問に迷うことなく答えたのは、部長ということになっっている桜さんだった。

「旧体育倉庫？ あんなホコリっぽい場所でもいいの？」

「はい。あの場所にいると、とても落ち着きますので……」

「そう……わかったわ。じゃあ、部室希望欄にも、旧体育倉庫って書いておいてね」

不思議そうな表情を浮かべてはいたけど、アンナ先生はそれ以上追及することなく、そう指示した。

指示された場所への記入をすべて終えた響姫は、申請書を先生に渡す。

アンナ先生はひととおり目を通すと、大きくひとつ頷いた。

「うん、それじゃあ、あとは私が顧問の欄を埋めてハンコを押せば完成ね。学園長に会ったら、私が責任を持って承認のハンコをもらっておくわね」

「でも、僕が言うのもなんですが、こんな部で認めてもらえるんでしょうか？」

さすがにちよつと不安になったので、僕は思わず尋ねしまっていたのだけだ。

「ふふ、あの学園長のじーさんだったら適当だから、ほとんどなにも考えずにハンコを貰えるわよ。ちよろいもんだから、安心して。先生同士の飲み会のお金なんかも、上手くおだてたら簡単に出してくれるし……って、ふふ、これは忘れてね」

……なんというか、アンナ先生って実は、結構腹黒い人なのかも……？

意外な一面を見てしまったような気がしたけど、今は素直に感謝しておこう。

僕たちは先生にお礼を述べ、職員室を出た。

放課後。

いつものように旧体育倉庫に集まった僕たちのもとに、生徒会長の湯浴先輩が訪れた。

部活動申請が通ったことを連絡するためだった。

「というわけで、本日よりこの旧体育倉庫は、幽霊部の部室として認められることになった。なので以前話していた、ここから早急に立ち去るといふ件も無効となったので、それも合わせて報告する」

あくまで事務的な物言いで一方向的に語り終わると、会長さんは一枚の紙を桜さんに手渡した。部活動申請の承諾書だった。

「ありがとうございます！」

「それにしても、アンナ先生を味方につけるとは。部活動の管理は生徒会の仕事でもあるのだが、学園長が許可を出したという話だったからな、私ども生徒会としては許可されたという事後報告をただ黙って受け取ることしかできなかつたよ」

苦笑まじりではあつたけど、会長さんはそう言って笑顔を見せてくれた。

「わざわざ生徒会長直々にこんなところまで来ていただいて、ご苦  
勞様でした」

「いや、これも生徒会の仕事だ。それに、あのときは世話になった  
からな……」

僕の労いの言葉に、会長さんはなにやら頬を赤くそめて目を逸ら  
す。

あのとき……っていうと、やっぱり……。

これは触れてはいけない話題だな、と思って、僕はその話をスル  
ーするつもりでいたのだけだ。

「あのときって……あゝ、お漏らしの……!!」

友雪が地雷を踏み、会長さんは真っ赤になって肩を震わせ始めて  
しまった。うつむいてはいるけど、目には涙も浮かんできているよ  
うだ。

「言ったっての！ほんっと、デリカシーないんだから！」

加害者側である友雪は、当然ながら響姫によってみぞおちを思い  
つきり殴られ、いつもどおりおなかを押さえてうずくまる結果にな  
ったわけだけだ。

確かに友雪はデリカシーがないけど、響姫は響姫で女らしさが足  
りないのでは。

なんてツツコミは、もちろん僕の心の中だけに留めておいた。

週末を挟んで月曜日の昼休み。

僕たちは今日も今日とて、旧体育倉庫へと集まっていた。

今までと違うのは、ここが正式に部室となったことだけど、だからといって、なにが変わるといってもない。

桜さんの頼みで三人の幽霊を見つけてきて、桜さんたちの部、幽霊部も認められ、部室で活動できるようにまでなった。

僕と友雪、響姫の三人は、部として認めてもらうための人数合わせ、という意味合いもあったわけだから、厳密に言えばもう来る必要はないのかもしれない。

だけど先週末の放課後、帰宅する間に「来週からもちゃんと部室に来てくださいですの」と、桜さんから言われていた。

桜さんは幽霊部の部長。つまりこれは部長命令。

だからそれは、従わなくてはいけないことなのだ。というか、従わないと呪われちゃうかもしれないし。

などと言いつつも、この場所に来るのは日課のようになっていて、部室であるこの旧体育倉庫に向かうあいだも、なんとなく心が躍る感じを受けていた。

端的に言えば、ここに来るのを楽しみにしている自分がいる、ということだ。

それは友雪や響姫にしても同じらしく、やっぱり軽やかな足取りで、自然とこの場所まで来たようだった。

「ところで、幽霊部の活動って、具体的になにをするつもりなの？」「えっと……。部活動って、普通なにをするものなのでしょう？」

僕の問いかけに、汗をひと筋たたりと垂らしながら、桜さんが問いかけ返してくる。

なにをするかも考えず、幽霊部を立ち上げたのか、この部長さんは。

もつとも、『幽霊部』という名前を考えたのは友雪だけだ。

「部活動の申請書には、なんて書いたんだっけ？」

「幽霊に関する知識と理解を深め、みな仲よく、手に手を取り合って研究に励む」

申請書に記載した響姫が、抑揚のない口調で答える。

なるほど、友雪が言っていたでたらめな活動内容を、一字一句間違えることなく申請書に書き写した、ってことか。

「俺が言ったのは、認めてもらうための方便みたいなもんだっけどな。ま、少しくらい申請内容と違っていても、目くじら立てて文句を言ってきたりはしないだろう」

活動内容を考えた張本人である友雪は、平然とそんなことをのたまう。

でも、確かにそうだよな。

だいたいあの申請内容じゃ、研究メインの部活みたいになっちゃうけど、実際に桜さんたちが幽霊について研究するなんてありえないだろうし。なにせ、本人たちが幽霊そのものなんだから。

冷静に考えてみると、よく許可が下りたよね、この幽霊部。

それはともかく、活動内容か……。

「るなは楽しく遊べれば、それでいいのだ！」

「ボクも、みなさんの温かな雰囲気に分れていられれば、それでいいかな……」

「わたくしも、幽霊部が認めてもらえただけで夢は叶ってしまいましたし、これ以上の高望みはしませんの」

幽霊部の主要メンバーとも言うべき幽霊のるなちゃん、華子さん、桜さんは、どうやらあまり期待できなさそうだ。

とすると、残るひとりの幽霊、元生徒会長の優美さんに望みをつなぎたいところだけだ。

「私もこれとってほしいことはないですわ。一度完璧主義の人生を途切れさせてしまったので、なんかもう、どうでもよくなっていますました」

ダメだ……。案を出すどころか、人生自体諦めてる……。

幽霊だからすでに人生は終わっているわけだけだ。

「こうして話しても、埒が明かないわ！」

基本的に気の短い響姫が、業を煮やしたのか、バンツと会議テーブルを叩いて立ち上がる。

「幽霊の幽霊による幽霊のための活動！」

「え？」

「部の活動内容よ！ あたしたち人間は、あくまで人数合わせなんだから、桜さんたちがやりたいことをやらなきゃダメなのよ！」

「うん、それはそうだろうけど……」

「だから！ すぐに思いつかないなら、思いついたときに改めて実行する！ それでいいじゃない！」

「うーん……」

まあ、それはそれで、べつにいいと思うのだけど。

「でもそれって、普段はなににもすることがないから、適当にだらけてる、ってことにならない？」

「そうなるわね」

「それじゃあ、活動内容と呼べないような……」

「もう！ だったらどうするってのよ！？ 細かい男は嫌われるわよ！？」（ま、あたしは玲を嫌ったりなんてしないけど……）」

また響姫が小さな声でぼそぼそとにか言った気がするけど、いつものことながら、僕にはよく聞こえなかった。

そんなことより、こうなったら僕がなにをするか決めたほうがよさそうな気がする。

うーん、だったら……。

「活動内容ってほどじゃないけどさ、この部屋ってホコリっぽいし、いろんな物がごちゃごちゃ置かれてたりするし、まずは掃除するところから始めない？」

僕の提案に、自主性のない幽霊ズを含め、みんな否定の言葉を挟むことはなかった。

「うん。反対がないなら決定で！ でも幽霊のみんなは、それでいいのかな？ ここが居心地いいって言ってたし、ホコリっぽいままのほうがいいとかってことは……」

「大丈夫ですよ。掃除なんて面倒なこと、自分ひとりではしたくなくっただけで、綺麗になるならそのほうが断然いいですよ！」

桜さんの言葉に、他の幽霊たちも「うんうん」と頷く。  
……どうやら自主性がないだけでなく、基本的にだらけた性格の幽霊たちばかりだということを、僕は今さらながらに思い知らされるのだった。

「ところで、桜さん」

「はい、なんですか?」

掃除を始める前にはつきりさせておこうと考え、僕は疑問に思っていたことを尋ねてみる。

「幽霊部って、僕たちがいてもいいの?」

「いてくれなきゃダメですよ!」

僕の言葉に、ちよつと眉を吊り上げながら答える桜さん。即答だった。

うん、僕たちはここにいてもいいんだ。

「ありがとう桜さん!」

と言って桜さんの両手を握ろうとしたのは、僕ではなく友雪。もちろん、その手はするりとすり抜けるだけだった。

「……こんな友雪でも?」

「えっと……どうでしょう……? いらない……かも?」

「むっ、ひどい……。いじいじ……」

桜さんに拒絶された友雪は、床に『の』の字を書いていじけ始める。

当然ながら桜さんは、茶目っ気を出して友雪をからかっただけのようだけど。

「確かに、友雪はいらないわね！ スケベだし、邪魔だし、人間のクズだし。ほら、いらぬ人間はさっさと帰りなさい！ しっしっしっ！」

……響姫のほうは、もしかしたら本気なのかもしれない。

掃除をするなら徹底的にやろう。

というわけで、放課後に時間をかけて大掃除をすることになった。

旧体育倉庫に一旦集まった僕たちは、それぞれの担当を決める。

まず、僕と友雪は男子だからということ、力仕事をメインに担当。具体的には、掃除用具の準備とダンボールなどに入っている荷物を外に運び出して整理、といった感じだ。

響姫はホウキで床を掃いたり雑巾でいろいろな場所を拭いたり、ロッカーの中を確認していらぬ物は処分するなどといった作業を担当。

幽霊の四人に関しては、ホウキを持つこともできないから、正直意味はないけど、応援だけしてもらおうことにした。

実際、あまり広くない旧体育倉庫だから、全員参加できたとしても、あまり効率よく掃除はできなかっただろう。

担当の割り振りに偏りがあるのが若干納得のいかない部分ではあるけど、僕や友雪に拒否権などあるはずもなく。

ふたり並んで掃除用具を取りに向かっていた。

目的地は新しいほうの体育倉庫。校庭の掃除をする道具なども含め、そこには掃除用具が揃っている。

放課後だから運動部は練習なんかもしているわけだし、体育倉庫の力は開いているはずだ。

近くにいた運動部の部員にひと声かけてから借りていく必要はあるけど、掃除なんてそうそうしなれないと思うし、断られる心配はまずないだろう。

問題は、旧体育倉庫から新体育倉庫までの距離が、結構離れているということ。

だからこそ、幽霊がいるような環境でも騒ぎになっていない、という利点もあるのだけど、こういう場合にはちよつと大変だ。

ただ歩くだけではなく、ホウキやチリトリ、バケツに雑巾、モップなんかもあるといいだろうか？　ともかく、そんな掃除用具を持って移動しなければならぬのだから、結構な重労働となってしまう。

でも、それも仕方がないことだ。響姫や桜さんに逆らったら、我が身が危ないし。

細かいことは気にせず、新体育倉庫に着いた僕たちは、近くにいたサツカー部のマネージャーらしき女子に断りを入れたあと、雑談をしながらも、いろいろな掃除用具を倉庫の中から取り出した。

「それにしても、友雪がいららないなんて、響姫もひどいよね。ほんとは一緒にいてほしいくせに」

「ん？　ああ、昼休みのことか。いや、あいつは本気で俺を邪魔者扱いしてるぞ、絶対」

「え〜？　そんなことないでしょ〜？」

「そんなことあるんだ。ま、俺は俺で、お前のその鈍さに随分助けられてるが」

「え？　どういふこと？」

「なんでもねーよ。ほら、さっさと運ぶぞー！」

「……なんか、僕だけ荷物多いんだけど！？　友雪、八つ当たりしてない！？」

「してない。口を動かすな、手を動かせ」

「む〜……」

釈然としないながらも、無駄口を叩いて到着が遅れると、響姫に怒られる可能性が高い。

僕は黙って掃除用具を抱え、歩き始めるのだった。

旧体育倉庫に戻った僕たちは、響姫にホウキを手渡した。

僕と友雪には、さらに力仕事が続いている。積み上げられたダンボール類を上から順に外へと運び出す作業だ。

連続の力仕事に加え、気温の高さと梅雨特有の湿気の多さも相まって、汗でべたべたして気持ち悪いことこの上ない。

ま、文句なんて言っていないで、体を動かすべきだけど。

旧体育倉庫内に入り、僕が積み上げられたダンボールを抱え上げた、そのとき。

サツサツと、響姫がホウキで床を掃き始めた。

途端に、床にうず高く降り積もっていたホコリが、ものの見事に舞い上がり、まるで濃霧の中に身を躍らせたかのような視界となってしまった。

濃霧と違うのは、それが器官に入ること、強烈な咳を引き起こすということ……。

入り口のドアと奥の壁の上部に取りつけられた小窓を開けてはいえるものの、狭い体育倉庫内は舞い上がったホコリで充満している状態だった。今ここでライターでもつけたら、粉塵爆発が起こりかねない。もちろん僕はライターなんて持ってないけど。

と、余裕をぶっこいてそんなことを考えている状況ではない。

ゲホゲホゲホッ！

僕と響姫が思いっきりホコリを吸い込み、むせ返る声が響き渡る。うつつ、目も痛くて開けられない……。

「うわっ。こりゃ、マスクが必要かもな、ゲホッ！」

倉庫の外に出ていた友雪が、中に入ってこようとして、軽くむせながらきびすを返して退避する。

「大丈夫ですか？」

僕と響姫に向けて、桜さんが心配の声をかけてくれる。

「桜さんは、ゲホッ、大丈夫、ゲホッ、なの？」

むせながらで聞き取りづらい僕の言葉に、桜さんはしっかりと答えてくれた。

「はい。わたくしたちは大丈夫ですの。息、してませんから」

「ああ……ケホッ！」

幽霊なんだから、それはそうか。

とりあえず、僕はたまらず倉庫の外に出る。入り口のすぐそばには、退避した友雪も立ちすくんでいた。

僕はハンカチを取り出そうとポケットに手をつ突っ込む。

と、指先にハンカチ以外の感触が。これは確か……。

「あっ、マスクがあつた。花粉症で使つたのが、ポケットに入った

「ままだったよ」

引っ張り出してみると、それはやっぱりマスクだった。衣替えはしたから上着は夏服になっているけど、六月だとまだ寒いこともあるし、ズボンのほうは冬服のままだったのだ。

「花粉症って……いつたいいつから入ってるんだよ、汚いな。っていうか、お前は制服をクリーニングに出したりしないのか？」

「ズボンを夏服のほうに替えたら、出すはずだよ。お母さんが」

「それより、花粉症用に使ってたマスクじゃあ、ひと月かふた月前だろ？ 菌とか繁殖してそうなの……」

「うーん、僕は花粉症の症状軽いし、一〜二回使っただけなんだからね。でも、さすがに使えないかな？」

「そんなの、捨てるか響姫にあげるかしかないだろ」

「え？ どうして響姫？」

響姫だったら菌なんかに負けないから大丈夫、ってことだろうか？

「ケホケホッ！ もう、ホコリ多すぎ！」

ちょうどいいタイミングで、話題となっていた響姫が倉庫から外に出てくる。

「はい、響姫。これ使って」

「え？ マスク？ 玲、持ってたんだ。でも、玲が使わなくていいの？」

「うん。ハウキ担当の響姫のほうが、ホコリの被害は大きいでしょ」

「ありがとう……。玲、優しいね……」（ポッ）

「いや、べつにたいしたことないけど」

なんだか、すごく感謝された。あんな汚れたマスクなのに。でも、喜んでくれたんだし、ま、いいか。

「……響姫、ついでに言うとそのマスク、玲が何度か使ったマスクだからな」

不意にかけられた友雪の言葉で、すでにマスクをつけたあとだった響姫はくぐもった驚きの声を上げる。

「ええっ!? (じゃあ、これって間接キスになる……? それに、このちよつと変わった匂いって、玲の匂いなんだ……)」

驚いたあと、くぐもった声でぼそぼそとなにか言っていたけど、やっぱり僕にはよく聞こえなかった。

マスクを装着した響姫は、なぜだか息を大きく何度も何度も吸い込み始めたのだけど……。

「いったい、なにをやってるんだろう?」

「これで響姫が体調崩したら、お前のせいだからな」

「え? でも友雪があんなこと言ったから……」

「無駄口叩いてる暇があったら、掃除しろ。まったく、ちよつとした冗談のつもりだったのに……」

あれ? なんで友雪は怒ってるんだろう?

僕には、なにがなにやら、まったくもって理解不能だった。

積んであったダンボールを倉庫の外に退避し、床のホコリも外へ掃き出し、会議テーブルやパイプ椅子に雑巾がけし、床にはモップまでかける。

そこまですると、狭くて薄汚れてひどかった旧体育倉庫の中もようやく人が生活できるレベルまで復帰し、随分とマシになったように感じられた。

考えてみたら僕たち、あんなに汚い部室でお昼を食べたりしていたんだよね。衛生的観点から見たら、最悪の環境だったに違いない。おなかを壊したり体調不良になったりしなかったのが不思議なくらいだ。

もっとも狭さに関しては、これからまたダンボールの荷物を部屋の中に戻す必要も出てくるだろうし、あまり変わらない可能性がある。

ダンボールを開けてみて、全部処分でOKなら問題ないのだけど。

ともかく、旧体育倉庫であり幽霊部の部室となったこの部屋は、これまでと比べたらかなり綺麗になった。

残る作業は、ダンボールの中身の確認と処分、そしてロッカーの確認だ。

まずは外に退避してある数多くのダンボールを、ガムテープで閉じてあるなしにかかわらずすべて開け放ち、中身を確認するところから始める。

もともと開いていたダンボールに関しては、すぐに確認できるとくに問題はないけど、ガムテープで留めてあるものはちょっと面

倒だ。

しかも、中になにが収められているのかわからないわけだし。

怪しいものとか、気持ち悪いものとか、見てはいけないものとかが入っていないとも限らないから、気が抜けない。

まずは、開いているダンボール群を確認すると、出てきたのは…

…。

(1) ハチマキやタスキ、旗など。体育祭とかで使ったものなのかな？ かなり年代が古く、変色して異様なニオイを放っているけど…。

(2) ストップウォッチとかメジャーとか、計測機類。破損したり故障したりして使えなくなったものが入っているらしい。捨てればよかったのに…。

(3) ごちゃごちゃに詰め込まれた小物類。キーホルダーとか、コインスターとか、旅行のお土産品なのだろうか。なぜ持ち帰らなかったのか…。

(4) 数十冊もある本。どうして体育倉庫に置いておく必要があるやら。これがエッチな雑誌とかだったりしたら、男子生徒が隠していたものと推測できるけど。ほとんどが海外のハードカバー小説類のようだし。もしかして、中には希少価値のある本も含まれていたりして？

とまあ、こんな感じで、開いているダンボールの中には、たいしたものは入っていなかった。

基本、全部処分で構わないだろう。海外の小説については、図書室にでも持っていくという選択肢もあるかもしれないけど。

「さてと、それじゃあ次は、ガムテープで留められてるダンボールだね」

「ああ。なにが出てきても、驚くんじゃないぞ」

「ちょ……ちょっと、やめてよ！ 怖いじゃない……」

ガラにもなく、響姫がしおらしく怖がる素振りを見せる。

でも旧体育倉庫の中からは、本物の幽霊が四人ほど、好奇の視線を向けていたりする状況なのだけど。

僕自身も、怖いという思いがなかったわけじゃない。でも、ビビっていたって仕方がないのは事実。

ここはさっさと作業を終えてしまふべきだ。

僕と友雪が一気にガムテープを剥がし、それぞれのダンボールを開け放つ。

しかして、その中に入ったのは……。

(1) 人間の手。

「って、いきなりすごい来たー！ー！ー！！」

「……いや、よく見る。これはマネキンの手だ。足や顔も胴体もある。ひとつのマネキンをダンボールに仕舞う際、そのままでは入らないからバラバラにしたんだろう」

「……でもどうしてマネキンが体育倉庫に……」

「そんなの知るか」

気を取り直して、次のダンボール。

(2) 古いゲーム機。初代ファミコンやらメガドラ、ブやらといっ

た、比較的メジャーなものだけではなく、スーパー セットビジョンとかS 1000とか、さらにはぴゅ 太やアル ディアなんてものまで……。

「おおおお！ これはお宝だ！」

「うん、すごいね！ ゾクゾクするよ！」

「……こんなの、ただのガラクタじゃないの」

かなりマニアックな僕と友雪の反応と、おそらく普通と思われる響姫の反応の温度差は、それはもう凄まじいものだった。  
で、次。

(3) エロ本。

「おお、これは！」

「袋とじがついてる！ まだ切られてないよ！ 友雪、慎重に……」

「任せろ！」

「……はあ。まったく、男って生き物は……」

(4) 体操着。

「おお、これは！」

「男子の体操着だね」

「捨て置け」

「……はあ。まったく、男って生き物は……」

そんなこんなで、ガムテープ留めされたダンボールには、一部意外な掘り出し物もあったのだけど、響姫の一存によってすべて廃棄処分されることとなった。

少しは広くなった部室内に戻り、僕たちはロッカーを前にして横に並ぶ。

この体育倉庫内に設置されてあるロッカーは、全部で五つ。

「あとは、ここにあるロッカーだな」

「うん。これもかなり、怖い気がするね」

「……もしかして、中に死体とか入っていたりしないわよね……？」

そう言って、響姫が再び怖がり始める。

なに言っていたんだか。響姫本人のほうが、よっぽど怖い存在だったのに。

「死体なんてあったら、二オイが大変なことになってるだろ」

「でもさ、白骨化しちゃったあとは、腐臭とかもしないんじゃない？」

「なるほど……」

「ちよつと、納得しないでよー！」

響姫は本気で怖がっているようだ。僕の背中に隠れるようにして震えている。

震えるたびに、背中に押しつけられた響姫のふくよかなバストを必要以上に感じてしまうのだけど……。

これって、あとで殴られたりしないかな……？

「実は桜さんの死体が隠されていたりしてな」

「……………」

僕も響姫も、なにも言葉を返すことができなかった。

「ま、そんなわけないだろ。……開けるぞ！」

バン！

開けるぞ、と言い終わる前にすでにロッカーが開け放たれていたのは、友雪も恐怖を感じていたからなのかもしれない。

「……なにも入ってないね」

「じゃあ、残りのも全部開けるぞ！」

バン！ バン！ バン！ バン！

続けざまに開け放たれたすべてのロッカーには……やっぱり、なにも入れられてはいなかった。

「ふう、よかった。なにも入ってなくて」

「桜さんの死体が入ってなくて、ほんとよかった……」

響姫まで本人を目の前にして不謹慎なことを言いながら、安堵の息をつく。

「入ってるわけないですよ。わたくしは、ここにいるんですから」

当の桜さんは、そう言って苦笑いを浮かべる。

「それじゃあ、もしかして、桜さんはロッカーから出てきたゾンビってことか？」

「違います！ うっう、ひどいですの……」

おそらくからかい半分だったのだろうけど、友雪が放った心ない  
ひと言で、桜さんはめそめそと泣き始めてしまった。

「あ、すまん……」

さすがの友雪も思わず素直に謝罪の声を漏らす。

でも、対する桜さんは、

「……なんちゃって、ですの。大丈夫、わたくしは全然気にしてま  
せんの。くすくす、びっくりしました？」

なんてイタズラっぽい笑みを浮かべながら、ペろっとお茶目に舌  
を出す。

珍しく、してやられた感のある友雪だった。

それから僕たちは、綺麗になった旧体育倉庫に毎日通い、桜さんたちと一緒に楽しい時間を過ごした。

部室の中で会話を弾ませるだけでなく、0コンを使って幽霊たちを散歩させてあげたりもした。

桜さんは僕に触れていれば外に出られるけど、普通の幽霊である三人は、僕に触れることすらできない。だから、外に出るとしたら、それぞれのいた場所から旧体育倉庫まで連れてきたときのように、0コンで操作する必要がある。

女子トイレでの一件のときは、響姫でも0コンを使った操作ができていたけど、どうやらそうやって響姫が操ることができるのは桜さんだけのようだ。

そんなわけで、僕が三人の幽霊のうちの誰かを0コンで操作し、桜さんが僕の体に触れた状態で散歩に出るのが常となっていた。

このとき、響姫と友雪も僕たちについてくる。

残った幽霊ふたりはお留守番になってしまっけど、それは仕方ないと諦めてもらうしかなかった。

狭い旧体育倉庫から広い外の世界に出られるということ、散歩は幽霊三人にとって一番楽しい活動となっているようだった。

交代で連れていってあげると言っているだけでも、我先にと散歩をせがんでくる。

それは、お子様風味でワガママなるなちゃんだけでなく、おとなしい華子さんや、完璧主義は諦めたものの、それでもプライドの高い雰囲気を持つ優美さんですらも同じだった。

「今日のはるなが散歩だな！」

わーいわーいと喜びの声を響かせながら、るなちゃんが部室から飛び出す。

僕はOコンを握りしめ、「それじゃ、行こうか」とみんなを促す。

「行ってらっしゃい……」

「ふん。勝手に行ってくればいいですわ」

居残りの華子さんと優美さんは、それぞれ寂しそうな言葉と強がり  
の言葉を投げかけながら見送ってくれた。

「もっと速く動かせー！ わーい、ダッシュだダッシュ！ きゃは  
ははは！ こんな明るい太陽の下で走るなんて、どれくらいぶりだ  
ろー！」

とても嬉しそうなるなちゃん。

養護教諭の幽霊なのだから、年齢的には完璧な大人のはずなのに、  
どう考えても小学生くらいにしかならない。

背が低くてちんまい印象だから、とっても似合っているのだけど。

「もっと激しくしていいぞー！ ダンスとかもしたいな！ 逆立ち  
とかでもいいぞー！」

るなちゃんは騒がしく喋りまくりながら、散歩を心から楽しんで  
いる。

踊ったりするのは、散歩とは言わないような気がするけど、それはそれでいいかもしれない。

ただ、るなちゃんの服装は、白衣の下に薄いグレーのブラウスとタイトなミニスカートというもの。

普通に歩いているだけでも見えそうなくらいなのに、あまり激しく動いたり、ましてや踊ったりしたら完璧にアウトだと思う。もちろん逆立ちなんて、もってのほかだ。

どう見ても小さな子供にしか見えないるなちゃんだから、べつに変な気持ちになったりはしないだろうけど、さすがに仮にも女性としての配慮が足りなさすぎな気がする。

そう指摘すると、

「るなは全然気にしないけどなー。でも、はしたないと言うなら、やめておくかー」

しぶしぶながら、るなちゃんは納得してくれた。

別の日、今度は華子さんを散歩に連れ出していた。

天気は雨。

梅雨時期だから、これが普通と言えるのかもしれないけど、今年はまだか雨の日が少ない気がする。

さすがに雨だし散歩は中止かと思いきや、華子さんは是非にと僕たちにお願ひしてきた。

「雨……いいわよね……。とくにこの梅雨時期独特のじめじめした感じ……。ほう、最高……」

なんだかつつとりしながら、華子さんは雨の中の散歩を楽しんでくれているようだ。

同行する僕たちは傘を差しているけど、華子さんには必要ない。幽霊だと、雨にも濡れないようだ。

「できれば雨の冷たさを、この肌を感じたかった……。うらめしい……」

誰に対して、うらめしく思っているのやら。

「いいじゃない。雨の中で傘も差さずに歩くんなんて、普通だったら女子にはできないわよ？ 雨で下着が透けちゃうもん。少なくとも、あたしには無理だわ」

なんて言っている響姫。

傘を差しているにもかかわらず、持ち方が下手なようで、かなりの雨粒が響姫の制服のブラウスを濡らしていた。

だから、薄っすらと下着が透けていたりするのだけど……。これは、指摘したほうがいいのか……？

と、友雪が僕の腕をそつとつかんできた。視線を向けると、黙って首を横に振る。

なるほど、言っただけのことか。

友雪は、響姫の今の様子を、黙って見て楽しむつもりなのだろう。だけど……。

そんなに近づいて息まで荒くして凝視していたら、どう考えても気づかれて……あ、殴られた。蹴られた。どつき倒された。

雨で濡れた地面に倒れ込んだ友雪を、さらに上から何度も何度も踏み潰す響姫。

こうなることがわかっているのに、友雪のやつ、どうしてあんなことをするのやら。合掌。

「……雨に濡れることができれば、ボクだって下着を透けさせて、友雪くんを誘惑することができるのに……。うらめしい……」

華子さんはなにやら、おかしな方向で恨みがましく思っているいるようだ。

そういえば、以前フラグが立った感じだったっけ。

幽霊ズの中で一番幽霊っぽい華子さんに好かれるあたり、友雪らしいと言えるのかもしれない。

「はあ、はあ……。まったく、友雪のやつ!」

友雪を退治し終え、息を荒くした響姫が、傘を持ち直し、僕の隣にすり寄ってきた。

雨の中でボロ雑巾のようになってる友雪は、まあ、この際放置でいいか。

「それじゃ、散歩を続けましょう」

と言って促す響姫は、友雪を蹴っ飛ばしたりしているあいだに、さらに雨に濡れ、完璧に下着が透けているような状態だった。

それなのに、どうして手で隠したりしないのかな？

しかもなんだか、目を逸らしても、わざわざ僕の視界に入るよう

な位置に移動してくるような気がするけど……。  
いったい、どうしたんだろう？

首をかしげながらも、僕たちは友雪を捨て置いたまま、散歩を続けた。

さらに別の日は、優美さんを散歩に連れてきていた。

「べつに私は、散歩なんか楽しみだなんて思っていないだからねっ  
！」

……いつからツンデレキャラになったのだろう。

でも、そんなことを言いながら、他の誰よりもつかれ、はしゃぎまくっているように思えた。

「あーもう！ 気分いいし、歌っちゃおうかしら！ ららら〜らら  
」

と、歌まで歌い出す始末。楽しんでるわけだし、構わないとは思っただけ……。

ただ、なるべく端っこを歩くようにはしているけど、校庭で部活動中の生徒なんかもいるのだから、もっとおとなしくしていたほうがいいのでは。

幽霊である優美さんや桜さんは、あまり人目に触れるべきじゃないと思うし。

僕の心配をよそに、優美さんは気持ちよさそうに歌っている。  
でも……。

(言っちゃ悪いけど、優美さん……とんでもない音痴よね……)  
(ああ……。女の子の歌を聴いてこんなこと言うのは俺の主義に反するが……殺人的な下手さだ……)

響姫と友雪が、ぼそぼそと本人に聞かれてはならない内緒話を展開する。

完璧主義はやめたと言っではいたけど、本質的にそういう気質は残っているようだから、これは言っではいけないことだろう。

(はう……、なんだか胸の奥からすべてが壊れていくような、変な感じですよ……)

幽霊である桜さんにまで悪影響を及ぼすとは、殺人的どころか殺幽霊効果までありそうだ。もともと死んでいるというのに。

「あーん、なんて気分がいいんでしょう！ 今日とはことん、歌いまくることにしますわー！」

……やめて……！

僕たちの心の中の悲痛な叫び声は、優美さん当人には決して届くことはなかった。

そんなこんなで、ちょっと大変なことがあったりしつつも、部活

動を満喫する充実した毎日が僕たちのもとには訪れていた。

だけど……。

楽しい日々はそう長く続かないものだということを、このときの僕たちは知るよしもなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6940x/>

---

レイコン

2011年10月19日09時21分発行